昭和九年

市勢一班

第18回

1
第一八回
市勢一班
昭和九年

市勢一斑

市島廣

廣島市ノ一部

目次

一、總說……一
二、戶口……八
三、市政及財政……一五
理事機關……一六
議決機關……一九
財政……二
四、都市計畫……三三
都市計畫事業……三三
區劃整理……三七
道路事業……三八
公園……三九
五、交通……四一

鐵道、電軌、バス……四三
既設線……四三
未成線……五〇
廣島港……五一
通信……五四
六、産業及經濟……五六
農業……五七
畜産業……五八
水産業……五九
工業……六〇
商業……六七
組合……七七
會社……七八
銀行……七九

七、教育……八二
八、保健衛生……八六
衛生施設……八六
上水道……九四
下水道……九九
九、社會事業……一〇一
十、司法及警備……一〇四
十一、兵事……一〇九
十二、神社及宗教……一一〇
十三、史蹟名勝……一一三
十四、官公衙其他……一一六

廣島市勢一斑

一、總說

稱呼 仰いでは千秋に魏峨たる中國山脈の偉容に培はれ俯しては萬古に汪洋たる太田川の清流に哺まるゝ我が廣島文化の濫觴は遐として遠い、今正史と口碑に傳ふるところを概說するに太田川河口の沙洲は一雨一水に幅員を增し其の堆積を加へ草木も漸く茂生するに至り蠏蝦蛤蜊の境域は終に變じて農夫の耒耜を容れ工匠の規矩準繩を執る處となり稱して五箇莊と曰ふに至つた。元來五箇は人民聚落の數にして地名ではないのであるが漸く世に用ゐられて五箇村落の總名となつたことは毛利氏の家臣兒玉就方、山縣員正が當時東林坊（二葉山麓太歲原（ガザイノヘラ）に在つたのであるが現在寺町光圓寺の前稱）寺僧願通に與へた文書に「五ケ之內新入つゝみの事不作候條可被開候萬作は奉伺預ケ可申候恐々謹言」と、此の書簡には其の年を記して居ないので其の年曆を識るに難いけれ共署名者は皆毛利元就、同隆元在世時代の家臣であるから五箇莊の名は約四百五十年前（弘治年中）より用ゐられて居たものと觀られる。

後天正十七年毛利輝元此の地を卜して築城し城名を廣島城と名付けたので地名も亦廣島と稱せられるに至つたもので「廣島」と云ふ地名は實に三百四十年前より用ゐられて居るものである。

沿革 大厦高屋、市塵櫛比し、電車自動車の旁午、行人の絡繹徂徠に渦を捲き塵を揚げつゝある現代都市の廣島も約四百年の古に溯れば實に微々たる一寒村僻邑に過ぎなかつた、天正以前迄は耕地と原野と藪澤と相交錯して纔に箱島、觀志塚、地家、別府、廣瀬等の邑里が其の間を點綴して居たと謂ふことである。

毛利輝元、祖父元就の遺業を紹いで後、天正十年豐臣氏と和し山陽、山陰兩道の內九箇國百二十萬五千石を領し安藝國高田郡郡山城に於て八州に令して居たが常に其の地の僻遠且狹隘なるを患ひ、居城を便宜の地に築き以て八州を朝せしめ四方に通ずるの都邑たらしめんと考へ家臣に命じて五箇の莊邑を調査せしめ其の好適なるを知るに及んで天正十六年十一月此の地に築城するべく決心し翌天正十七年四月其の工を起し五箇年を經たる文錄二年竣功したものである、而して慶長五年關ヶ原の役に輝元西軍に黨し推されて其の盟主となり大敗して同年十月長防二州に削封せられ、廣島を去つたのであるが天正十七年築城を計畫してより在城僅に十二年間であつた。

次いで同年十月尾州淸洲の城主福島正則其の後を襲ひ居城すること十八年間元和五年六月修城の責

廣島城天守

を以て信濃に左遷せられた。

其の後へ同年七月紀州名草郡和歌山城主淺野長晟入封居城するに及んで市坊の制漸くなり城下發展の勢を示し多數臣僚及商工人の移住するに依つて頻に殷賑を加へ市制漸く整ふに至り戸口も大いに增加し寛永二年十二月町奉行田原傳右衞門の報告に據れば町數五十五箇町、戸數五千七百四十一戸、此の內自己所有のもの二千二百八十八戸、借家三千四百五十八戸、而して自家の中二百八十八戸と借家の中千三百九十三戸とは共に淺野氏入封以來增加したもので元和五年より此の年迄僅に七年にして千六百八十一戸、實に入封以前の戸數に比して約五分の二の增加を示して居るのである、而して明暦三年二月の大火災後市區の改正を施してより面目を一新し爾來二百五十有餘年の久しき間幾多の

變遷を經て明治維新に至つたものである。

明治二年六月淺野氏藩籍を奉還し同四年七月藩を廢して縣を置き、而して廣島は其の第一大區に屬し市政局幹事に依り管掌せられて居た、同十一年十一月郡區制を施行せられてより廣島區と稱し縣に隸屬して區政を執行し、同二十二年四月市制施行と同時に廣島市と改稱し市會、市參事會、市長其の他の諸機關を具へ市政各般の事務を執行することゝなつた、而して其の後行政區域の大した變更なく昭和四年四月附近七箇町村の合併を行ひ逐年市勢の隆盛を圖り今や戸數七萬六千三百戸、人口三十萬五千餘人中國一の大都市を形成し現在に至つた。

位　置　市は東經百三十二度二十五分十六秒乃至二十九分五十六秒、北緯三十四度二十分乃至二十四分二十七秒に亙り廣島縣安藝國中央の南西に位し其の境界東及北半面は安藝郡に、西は佐伯郡に、北半面は安佐郡に接し南一帶は廣島灣に臨んで居る。

地　勢　東北西の三方は山脈丘陵に圍繞せられ南一面は海に臨み市内は概ね北より南に綏斜し、河川も亦從て南流し而して北方三十三里に淵源してゐる太田川は市の北端に來りて兩分し更に兩分し遂に七派川と成つて皆南流し廣島灣に注いで居る、衙衢は概ね平坦であるが東方に比治山、城山等孤丘があり、西南に江波山、丸子山、皿山の小陵があり周圍には尾長山、二葉山、新庄山、茶臼山、鬼ケ城山等相連り海上廣島灣頭に宇品島、東に金輪島、南に似島、辨天島等が在る。

地　質　市の地盤は太田川河口の圓沙方洲より成つて地質上沖積層に屬し、比治山、江波山、丸子山、皿山等の諸丘阜に露出して居る花崗岩の外は一般に柔軟な泥土及砂礫より成つて居る。

廣袤面積　市の廣袤は東西十二粁二二七、南北九粁六〇一、總面積六十九平方粁八八〇、(四方里五分三厘一毛)で此の段別七千四十六町二段四畝十三歩内耕地面積千五百七十七町四段歩、河川、堤防溝渠面積三百五十五町三段二十二歩である。

面積及廣袤

周圍	面積	廣袤					
		方位	地名	距離	方位	地名	距離
四七、五〇九米	六九、八八〇、四二四平方米	極東	仁保町山ノ神	二、二二七米	極南	似島町長濱	九、六〇一米
		極西	草津町西原ケ尻		極北	牛田町天水	

各種土地面積

官有地	民有地			合計
	有租地	免租及無租地		
二、二六〇、七六六平方米	三三、一四五、四四六平方米	三、四四五、二八七平方米		四七、八五一、五一八平方米

氣　象　本市は氣温概して中和であつて昭和八年中平均氣温は十四度九にして昨年及平年に比較し何れも零度二高く最高の極は七月二十日の三十五度五、最低氣温の極は一月二十七日の零下五度六である、累年の平均氣温を見るに十四度七であつて既往に於ける最高氣温の極は大正十三年八月五日の三十八度一、最低の極は大正六年十二月二十八日の零下八度六である。

降水量は千二百九十七粍八で昨年よりは四十六粍一多く平年よりは二百三十粍五寡量である、月別最多降水量は四月の三百三粍にして一日の降水量は最も多いのは六月二十四日の六十八粍四である、降水日數は百三十三日を算へ平年降水量は千五百二十八粍三、降水日數は百三十六日にして既往に於ける一日の最多降水量は大正十五年九月十一日の三百三十九粍六である。

初霜は十一月九日にして昨年より九日早く平年より七日早い、終霜は翌年四月二日にして昨年より一日遲く平年より六日早い。

初雪は十二月十二日にして昨年と同様にて平年より二日遲い、終雪は翌年三月十三日にして昨年より十八日早く平年より四日早い、降雪の最深は明治二十六年一月五日の三十糎七を測て居る。

濕度は平均七十四%にして平年及昨年と同じく最も乾燥した月は九月の七十%である、濕度の最小極は三月二十八日の二十八%である。

風は一般に弱く平均風速度は一、五米/秒であつて暴風日はない、風向は夏季は南西の風多く冬季は北西の風が多い、而して冬季の外は年中晝間は南西の風多く夜間は北の風が多い。

快晴日は三十八日にして昨年よりは十一日少く平年よりは一日少い。

地震は大體少く昭和八年中に於て二回あり昨年より一回多い。

昭和八年中氣象の概要は次の如きものである。

月次	氣温 平均	氣温 最高	氣温 最低	濕度平均	風速平均	地震回數	天氣日數 快晴	天氣日數 曇天	天氣日數 降水	降水量
一月	二・九度	一二・九度	五・六度	七三・七%	一・四米	—	—	一二	八	五六・一粍
二月	三・六	一二・九	三・六	七〇・〇	一・四	—	三	七	八	二九・二
三月	六・四	一六・八	二・六	七〇・七	一・六	二	二	一三	一四	九九・八
四月	一二・七	二三・二	一・〇	七四・九	一・四	—	六	一四	一五	三〇三・〇
五月	一八・五	二八・二	六・二	七四・二	一・五	—	七	一三	一三	一二一・六
六月	二二・九	三〇・六	一二・二	七四・七	一・四	—	—	一三	一〇	二二・九
七月	二七・六	三五・五	二二・〇	七四・六	一・五	—	一	一三	一〇	二七・〇

八月	二七・三	三四・四	二一・四	七五・七	一・五	—	一	一〇	一〇	三八・五
九月	二三・二	三五・〇	一一・四	六九・七	一・七	—	八	八	七	五六・七
十月	一六・四	二七・九	四・三	七五・〇	一・七	—	二	一三	一四	三三八・四
十一月	一一・一	二〇・九	〇・八	七六・八	一・四	—	七	七	一四	八三・九
十二月	六・五	一六・二	一・五	七四・九	一・五	—	一	一三	一〇	四〇・七
計及平均	一四・九	三五・五	五・六	七三・七	一・五	二	三八	一三一	一三三	一、二九七・八
昭和七年	一四・六	三五・七	—五・四	七四・四	一・五	一	四九	一三	一三七	一、二五一・七
同六年	一四・八	三五・〇	—五・八	七五・〇	一・四	五	五一	一四八	一四三	一、七三〇・二

二、戸口

戸數 戸數は逐年增加し昭和八年末現在の統計に依れば七萬六千二百九十五戸であつて前年に比較し二千六百八十八戸の增加である。

人口 人口も亦年々激增の趨勢にあつて昭和八年末現在の統計に就き觀るに三十萬五千百六十五人であつて、內男十五萬四千二百三十六人、女十五萬九百二十九人にして男女別の數的比較は男百に對して女九十七の割合を示して居る。

斯の如く近年本市の人口が六大都市に次ぐ大人口となつた所以のものは、本市が天賦の形勝に據り海陸交通上要衝の位置を占め、商工業の發展に伴ひ移住者の員數增加し來つたに由ると雖も抑々昭和四年附近七箇町村の合併を斷行し、爾後幾多諸施設の完成を見、且土木工事の施行等があつて市況の振興を促成したに因ること甚だ大なるものがある、若夫れ都市の盛衰が其の戸口の增否を以て卜すべしとするならば本市に此の傾向あるは頗る喜ぶべき現象の一であると謂はざるを得ないのである。

現住人口を職業別より觀るに其の大半は所謂商工業人口であつて商工業を以て市是とし之に依て大都市建設に躍進しつゝある本市趨勢の一斑を窺ひ知ることが出來る。

戸口の趨勢

年次	現住 戸數	現住 人口 總數	現住 人口 男	現住 人口 女	本籍 戸數	本籍 人口 總數	本籍 人口 男	本籍 人口 女
昭和四年	六六、八六〇	二七三、三三八	一三七、三九〇	一三五、九四八	四五、一八九	二一八、八一四	一〇九、八八五	一〇八、九二九

人口動態

年次	性別	出生	死亡	結婚	離婚
同五年	男	六七、五七五	二七七、〇九五	一三九、六六八	一〇九、八八〇
同六年	男	七〇、四六八	二八八、九七八	一四五、二一九	一一三、七九二
同七年	男	七三、六〇七	二九四、一〇〇	一四九、三〇八	一二二、六五六
同八年	男	七六、二九五	三〇五、一六五	一五四、一三六	一一六、一一三
昭和四年	男	三、八五七人	二、〇五三人	一三七、四二七	一三一、〇七一
	女	三、九三四	一、九六八	一四三、七五九	一三五、九八七
同五年	男	三、八三九	二、二五三	一四四、七九二	一三七、六〇一
	女	三、七三六	二、〇三一	一五〇、九二九	一三三、四四八
同六年	男	四、三八三	二、二〇六	一四四、七九二	一一、九一一
	女	四、一〇一	二、一四五	一四六、一六六	一一三、一九五
同七年	男	三、三三三	一、九六三	一四六、六六四	一一四、九四五
	女	三、〇一九	一、七九六	一四七、四三五	一一二、六五六
同八年	男	四、一五八	二、四九五	一五〇、九二九	一〇九、八八〇
	女	四、〇一六	二、二四五	一五四、一三六	一一六、一一三

職業別人口（世帯主）累年比較

年次	農業	水産業	鑛業	工業	商業	交通業	公務自由業	其他有業者	無職業	計
昭和三年	二一、三七七	三、八四〇	—	四〇、二一九	五〇、一四二	一三、一二一	二五、一一六	二六、一三九	四四、九〇九	二二四、八五三
同四年	一九、六一五	八、六九二	三九二	五四、二七五	六二、六〇一	一六、〇七九	三〇、二八七	三三、八一六	四七、五八一	二七三、三三八
同五年	一六、三三六	三、六六〇	五一六	七一、八五六	七五、四六一	二〇、七四五	三四、八五九	一五、一三三	三八、五二九	二七七、〇九五
同六年	一六、七七一	四、二三三	七二六	七七、三四八	八二、〇七五	二三、七四三	二八、五一五	一八、〇六五	三七、五〇三	二八八、九七八
同七年	一五、九七一	五、一三一	七七五	七八、一九三	八一、一九三九	二四、五八六	二九、七七三	一八、八五二	三八、八八〇	二九四、一〇〇
同八年	一七、三八三	六、五一三	七五七	七九、五四〇	八三、五一五	二六、〇〇六	三一、〇九四	二〇、二九五	四〇、〇六三	三〇五、一六五

戸口累年比較

年次	戸數	人口 男	人口 女	人口 計	摘要
明治十年	一九、四二四戸	三八、一七四人	三七、五八六人	七五、七六〇人	
同十五年	二〇、五七四	三八、七八六	三八、七八六	七七、四七一	
同二十年	二一、六九〇	三九、五六八	三九、四八六	七九、一〇〇	

廢藩置縣以前の戸口數表

時代	戸數	人口	摘要
福島氏時代（末期）	四、〇六五 内 自己所有家　二、〇〇〇 借家　二、〇六五		（末期ヲ元和五年トシテ現在ヨリ三百十五年前）
同　二十二年	二三、八二四	四一、三九〇	八三、三八七
同　二十七年	二五、八六六	四八、四四〇	八六、八七一
同　三十二年	三一、一四五	五五、三〇八	二一〇、七六〇
同　三十七年	四〇、八〇八	七〇、三九六	一三六、〇一二
同　四十二年	四二、四七八	七二、二二九	一四一、〇八〇
大正三年	四七、三九〇	八四、五六六	一六三、〇三五
同　八年	三九、五二四	七七、〇三六	一五五、四一八
同　十三年	四五、三九九	八九、三八二	一七七、二二〇
昭和四年	六六、八六〇	一三三、三九〇	二七三、三二八
同　八年	七六、一九五	一五四、一三六	三〇五、一六五

戸數、人口ノ增加シタルハ元宇品町ヲ合併シタル結果ニ由ル

戸數、人口ノ著シク增加シタルハ隣接七箇町村ヲ合併シタル結果ニ由ル

時代	戸數	人口	摘要
淺野氏時代 寛永二年	内 自己所有家　五、七四六 借家　二、二八八 二、四五八		町數五十五箇町（現在ヨリ三百九年前）
同 寛文三年	内 食錄家　四、八五四 農工商家　一、三五〇餘 祠廟寺院　三、五〇四 四七	農工商　三六、一四二 僧侶　一、〇七〇	食錄家人口不詳（同　二百七十一年前）
同 延寶五年	内 農工商家　四、三八九 町分　三、六五三 新開分　七三七	農工商男　三七、四〇六 僧侶女　一九、五三〇 一七、八七六 一、一八五	食錄戸口不加 町數　六十八箇町（同　二百五十九年前）
同 正德五年	内 農工商　四、八五一 町分　三、九五八 新開分　八九三 神社六　寺院二一	農工商　五六、〇〇八 町分　三七、一五五 新開分　一八、八五三	（同　二百十七年前）

同寶暦十年	町分農工商 二七、九八七 男 一五、〇七四 女 一二、九一二 新開分不明		（同 百七十四年前）
同明和五年	町分農工商 二六、六九三 男 一五、三八九 女 一三、三〇四 新開分不明		（現在ヨリ百六十六年前）
同安永六年	町分農工商 二七、五七七 男 一四、九一四 女 一二、六六三 新開分不明		（同 百五十七年前）
文政年中	農工商 四九、二四八 町分 二六、二五五 新開分 二三、四九三	農工商 六、五四五 町分 三、八六二 新開分 二、六八三	（同 百餘年前）
同明治二年	八八、六〇七 内 諸士足輕諸隊ノ者三二、五八二 （男一六、四九二 女一六、〇九〇） 御家中召遣ノ者共 五、一六九 （男 二、七九三 女 二、三七六） 町新開農工商 五〇、〇二三 （男二五、四四七 女二四、五七六） 社人 五一 （男二五 女二六） 僧 七七二 （男五六〇女二一二） 神女 一〇		（同 六十六年前）
明治四年	七二、七五二	一七、六七二	廢藩置縣後戸口トモ一時減少 （同 六十四年前）

三、市政及財政

卷頭總說に於て敍述の如く本市の沿革は古く從て所謂市政の變遷は時代と共に幾多の曲折を經て現

在に至つて居るのであるが今之を大別するに

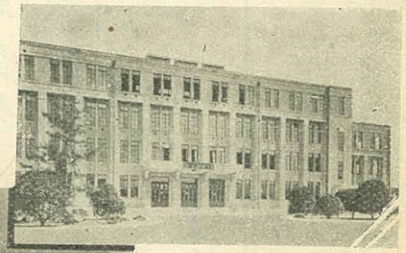
理事機關

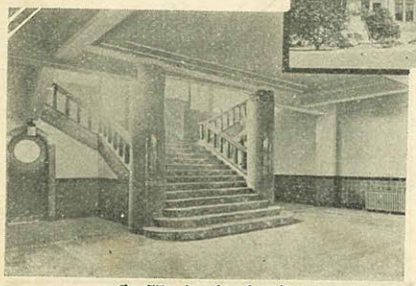
本市理事機關の組織及之が執行に就いて述べれば市長、助役、收入役の下に十六課を置き之に二十五係を配し特に土木、水道關係に部を設け夫々專門に特殊の事務を擔當し其の他廳外に各種の廨があり以て横に縱に相連繫統一して庶政を施行しつゝあるのである。

尙市會諸般の事務を執る爲に市會事務局があり市會議長の下に市會書記長及書記を置き別に市政に關する系統を作つて居る。

是等系統の大要を示せば次の如くである。

廣島市廳





廳舍表玄關內

廣島市行政組織

- 市長
  - 助役
    - 文書課
      - 秘書課
      - 調査係
      - 市役所出張所（八箇所）（宇品、仁保、矢賀、牛田、三篠、已斐、古田、草津）
    - 會計課
      - 出納係
      - 用度係
    - 庶務課
      - 庶務係
        - 公會堂
      - 財務係
      - 選擧係
    - 教育課
      - 教務係
        - 學校（小學校三十五校、中等學校二校、其他八校）
      - 管理係
      - 社會教育係
        - 青年訓練所三十二箇所、圖書館
    - 保健課
      - 衞生係
        - 船入病院、衞生試驗所、畑賀病院（結核療養所）
      - 防疫係
      - 清掃係
    - 戸籍兵事課
      - 戸籍係
      - 兵事係
    - 産業課
      - 商工係
        - 市營棧橋、屠場、家畜市場、公設市場六箇所、保稅地域、起重機、倉庫（上屋）
      - 統計係
      - 農水産係
      - 市稅係
    - 稅務課
      - 國稅係
      - 檢稅係
      - 徵稅係
    - 社會課
      - 保護係
        - 託兒所六箇所、方面委員
      - 福利係
        - 公益質屋二箇所、診療所二箇所、隣保館二箇所、市營住宅
      - 職業係
        - 職業紹介所、勞働紹介所
    - 土木部
      - 土木課
        - 公園三箇所、抽水所十一箇所、灌漑所七箇所
      - 營繕課
      - 地理課
      - 都市計畫課
    - 水道部
      - 經理課
      - 工務課
        - 牛田淨水場、已斐調整場
        - 基町分室
    - 臨時水道擴張部
      - 經理課
      - 工務課
        - 牛田淨水場事務所、原村坂水工事場
  - 收入役

職員（昭和九年九月十五日現在）			
市長	缺員	囑託	五
職務管掌市長	一	雇	四八
助役	缺員	工手	八
職務管掌助役	一	隣保館教師	二
收入役	一	保姆	二〇
部長	二	守衞	七
主事	一四	看守	六
學視	三	運轉手	一三
技師	一〇	電氣工	二
市醫	一一	機關工	二
書記	二〇九	交換手	四
技手	四八	給仕	三六
機關手	七	使丁	八一
衞生監督	二	園丁	三
獸醫	二	計	二三六
調劑員	二		
産業技手	一〇		
衞生巡視	二二		
書記補	三五		
技手補	一二		
機關手補	一		
計	三九三		

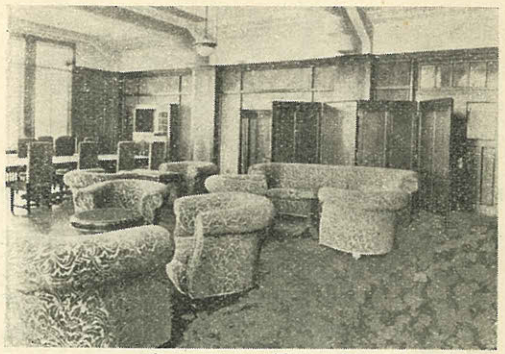
合計　六二九人

備考　雇傭人八月給者ノミヲ表示セリ

尙市會諸般の事務を執る爲に市會事務局があり市會議長の下に市會書記長及書記を置き別に市政に關する系統を作つて居る。

是等系統の大要を示せば次の如くである。

合表玄關内



市長公室

而して明治二十二年市制施行以來現在迄市長を迎送すること十五人であつて、(其の間大正三年三月二十日より同四年一月二十一日迄及昭和九年三月十八日より現在迄市長助役共に闕員及故障の爲廣島縣より官吏を派遣し市長の職務を管掌)共に本市政の向上發展の爲に努力したのである、歷代市長及市長職務管掌の氏名と任期及管掌期間を示せば次の通である。

明治二十二年八月二十九日裁可	三木達	
同二十二年十一月二十八日辭任		
明治二十二年十一月二十八日裁可	伴資健	
同二十八年十一月二十七日任期滿限		
明治二十九年一月十日裁可	佐藤正	
同二十九年四月二十日辭任		

明治二十九年四月二十日裁可	伴資健	
同三十五年四月十九日任期滿限		
同三十五年四月二十日再任	伴資健	
同三十九年八月三十日辭任		
明治三十九年八月三十一日裁可	高東康一	
同四十二年四月二十四日辭任		
明治四十五年五月十七日裁可	小田貫一	
同四十二年七月二十二日死亡		
明治四十二年九月九日裁可	渡邊又三郎	
同四十三年七月三日辭任		
明治四十三年九月二十八日裁可	長屋謙二	
大正二年二月十六日死亡		
大正三年一月二十九日裁可	豐島陽藏	
同三年四月二日辭任		
大正三年三月二十日任命市長職務管掌	武岡充忠	
同四年一月二十一日引上廣島縣理事官		
大正四年一月二十二日裁可	吉村平造	
同五年十二月二十五日辭任		
大正六年十月八日裁可	田部正壯	
同十年十月七日任期滿限		
大正十年四月十七日	佐藤信安	
同十四年一月三十一日辭任		
大正十四年八月二十四日	川淵龍起	
昭和四年八月二十三日任期滿限		
昭和五年五月十六日就任	伊藤貞次	
同九年五月十五日任期滿限		
現在昭和九年三月十八日任命市長職務管掌地方事務官	井田完二	

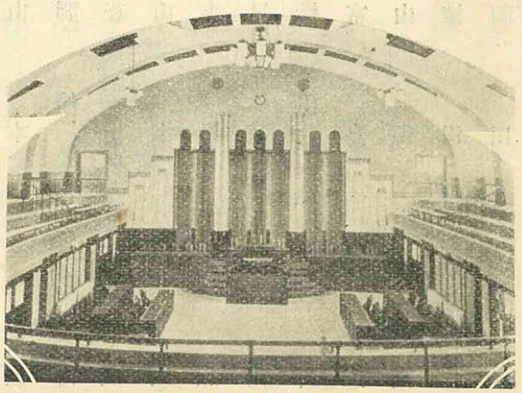
議決機關

議決機關としての市會は其の定數を四十四人とし條例を以て東部選擧區に於て二十一人、西部選擧區に於て二十三人を定員と定め之を選出して居る。

而して市制施行以來市會議員の改選を行ふこと十三回補闕選擧を行ふこと二回に及んで居る。

尙其の市會議長の任期及氏名は次の如くである。

自明治二十二年六月至同年八月	三木達
自明治二十二年十二月至同年十九月	渡邊又三郎
自明治二十三年十月至同年六月	桐原恒三郎



市會議事堂

自明治二十九年一月至同三十年一月	岡	謙藏
自明治三十年一月至同三十五年一月	桐原	恒三郎
自明治三十六年一月至同三十年一月	尾形	武三郎
自明治三十七年一月至同三十七年一月	山本	三朗
自明治三十八年一月至同三十年一月	岡崎	仁三郎
自明治三十九年一月至同三十年一月	森川	儔藏
自明治四十一年一月至同四十二年一月	山本	三朗
自明治四十二年一月至同四十三年一月	森川	儔藏
自明治四十四年一月至同四十五年一月	早速	整爾
自大正二年一月至同大正六年一月	富島	暢夫
自大正六年一月至同大正十年一月	山縣	齊高
自大正十年一月至同大正十四年十一月	植田	壽作
自大正十四年十一月至同	岡田	才助

自大正十四年六月	森	保祐
自昭和四年六月至同昭和四年八月	加藤	俊夫
自昭和六年八月至同昭和八年五月	西村	榮藏
自昭和八年六月現在	松坂	義正

市參事會は其の定數を十人と定められ市會議員中より選出せられて居る。

財政

地方財政の急激なる膨脹は國民經濟に於ける最も顯著なる傾向の一つである、試に之を國家財政の膨脹に比して觀るならば、明治四十四年迄は國費五億八千五百萬圓に對し、地方費は全體として二億六千萬圓であり、其の中市財政の經費は僅に七千百萬圓に過ぎなかつたものが昭和五年に於ては國費十五億五千七百萬圓に對し地方費は全體として十七億五千二百萬圓を算し、內市費は七億七千六百萬圓に上つて居る、之に依て之を觀れば最近十數年間に於て我が國に於ける全般の都市が如何に財政上の飛躍をなして居るかを知ることが出來る、殊に近時人口の都市集中は其の傾向一層著しいものがあると共に澎湃として起れる社會思想の發展に應じて諸種の社會問題は相踵いで起り、是等の施設事業

の爲に都市財政は愈々增大する勢を示して居る。

大勢以上の如くなので獨り本市財政ばかり此の傾向から免れることを得ないのである。

試に最近に於ける本市歲計及市民負担の狀況を表示すれば次の如くである。

一般會計歲計比較表（決算額ヲ示ス）

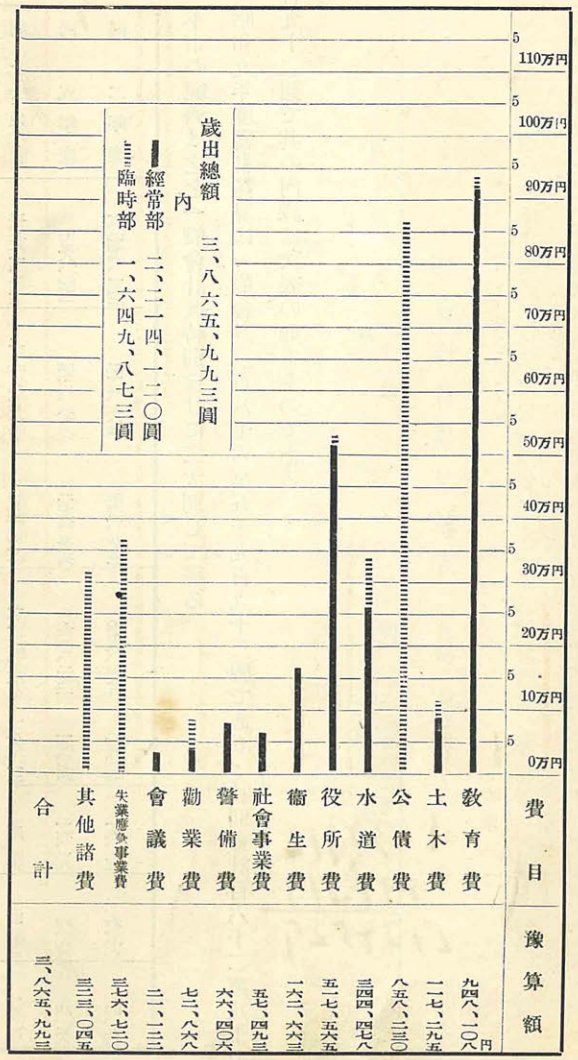
年度	歲入	歲出 經常	歲出 臨時	歲出 計	現住戸數一戸平均額 歲入	現住戸數一戸平均額 歲出	現住人口一人平均額 歲入	現住人口一人平均額 歲出
昭和七年度	五、四八一、五八九円	二、〇八一、一二二円	二、五一九、二三二円	四、六〇〇、三四三円	七四、四七円	六二、五〇円	一八、六四円	一五、六四円
同六年度	五、五九〇、九八二	二、〇〇五、九〇四	二、一一九、一六四	四、一二五、〇六八	八二、七四	六一、〇四	二〇、一八	一四、八九
同五年度	六、二二七、〇〇二	三、六一四、六一八	一、七六二、二四二	五、三七六、八六一	九二、一五	七九、五六	二二、四七	一九、〇四
同四年度	五、七九七、三一二	三、五四七、四五六	二、〇七一、一四一	五、六一九、五九七	八六、七一	八四、〇五	二一、二一	二〇、五六
同三年度	五、〇〇〇、五三四	二、七〇九、九五三	一、八二八、二七五	四、五三八、二二八	八四、八一	八六、〇四	二三、六二	二一、四四
同二年度	六、二一三、六八三	二、五〇四、七九六	三、一三五、一五〇	五、六三九、九四六	一二〇、三五	一〇九、二四	三〇、一九	二七、四〇
同元年度	五、五三五、三八三	二、一七二、〇一三	一、九八二、〇六八	四、一二五、〇八一	一〇七、二三	八二、四二	二六、九〇	二〇、六八
大正十五年度								
同十年度	三、七八一、二五七	一、六三九、七一六	四九四、八一一	二、一三四、五二八	八八、一二	五四、四六	二一、七六	一三、三三
同五年度	七五八、〇七一	四二三、六六六	二七六、五八六	七〇〇、二五二	一七、七四	一六、三九	四、九六	四、五八
同二年度	一、〇七六、一七二	三一五、七八七	四六二、九七二	七七八、七五九	二三、〇七	一六、六五	六、七九	四、九〇

本市の經濟は之を一般會計及特別會計に二大別して居る。

昭和九年度當初豫算は一般會計三百八十六萬五千九百九十三圓であり、特別會計百六十二萬八千七百九十二圓で其の内譯は次表の如きものである。

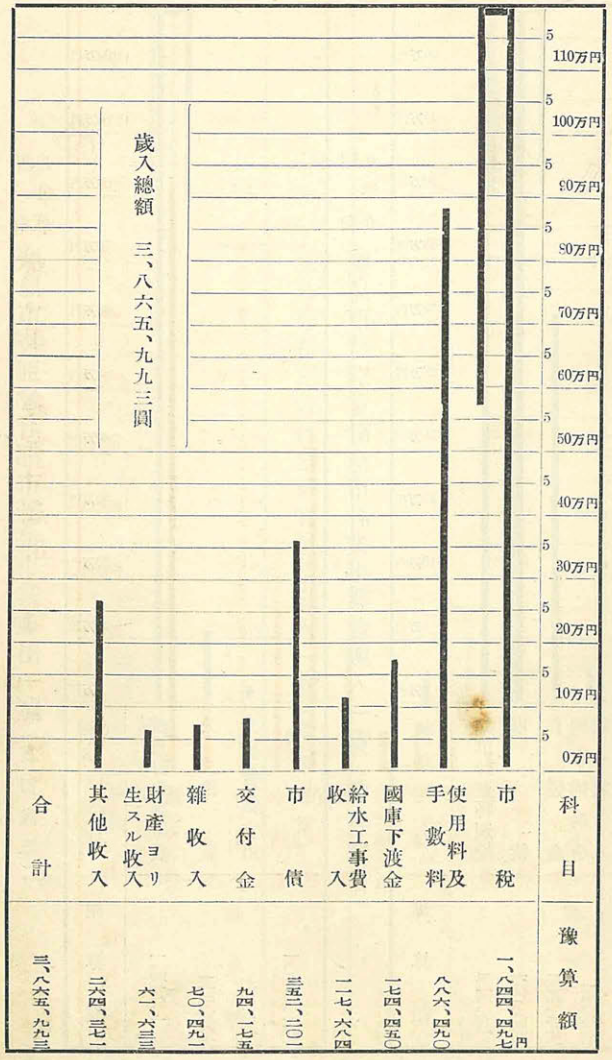
1639716
494.811
2134527

昭和九年度 廣島市一般會計歳出一覽（當初豫算）



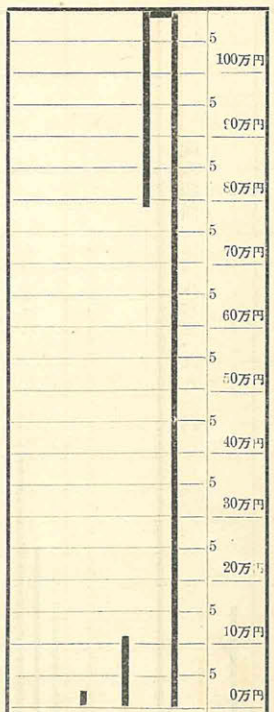
費目	豫算額
教育費	九四八、一〇八円
土木費	一一七、二九五
公債費	八五八、二三〇
水道費	三四四、四七八
役所費	五一七、五六五
衞生費	一六二、六六三
社會事業費	五七、四九三
警備費	六六、四〇六
勸業費	七二、八六八
會議費	二一、一三
失業應急事業費	三七六、七二〇
其他諸費	三二三、〇四五
合計	三、八六五、九九三

昭和九年度 廣島市一般會計歳入一覽（當初豫算）



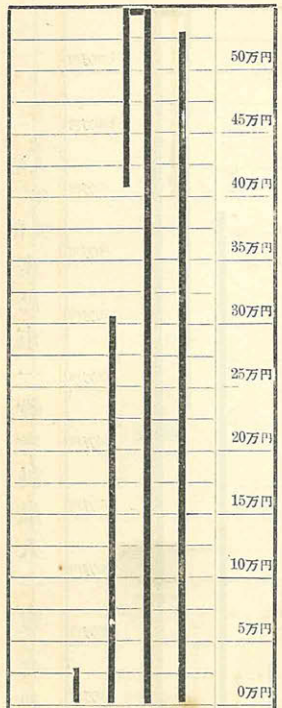
科目	豫算額
市税	一、八四四、四九七円
使用料及手數料	八八六、四九〇
國庫下渡金	一七四、四五〇
給水工事費收入	一一七、六八四
市債	三五二、二〇一
交付金	九四、一七五
雜收入	七〇、四九一
財産ヨリ生スル收入	六一、六三三
其他收入	二六四、三七一
合計	三、八六五、九九三

昭和九年度 廣島市特別會計都市計畫事業歲出一覽（當初豫算）



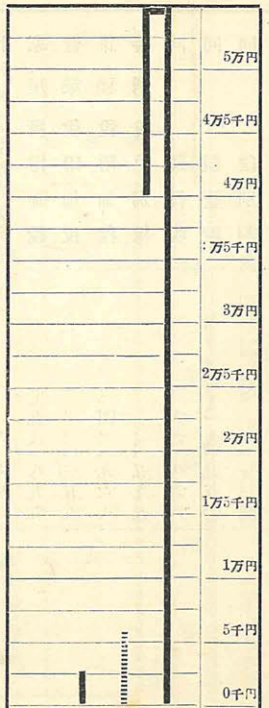
費目	豫算額
都市計畫事業費	一、四一八、一〇八円
公債費	一一二、六八一
豫備費雜支出	一九、三六〇
合計	一、五五〇、一四九

昭和九年度 廣島市特別會計都市計畫事業歲入一覽（當初豫算）



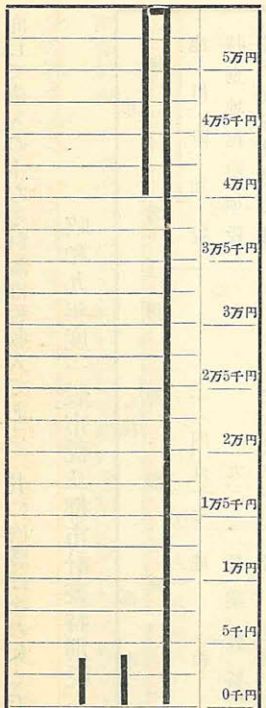
科目	豫算額
都市計畫特別稅	五三六、六四九円
市債	六八〇、〇〇〇
負擔金	三〇九、二九三
國庫補助金	三四、一〇七
雜收入	
合計	一、五五〇、一四九

昭和九年度 廣島市特別會計公益質屋費歲出一覽（當初豫算）



費目	豫算額
貸付金	七〇、〇〇〇円
公債費	五、四六〇
事務費其他	三、一八三
合計	七八、六四三

昭和九年度 廣島市特別會計公益質屋費歲入一覽（當初豫算）



科目	豫算額
貸付金戻入	七〇、〇〇一円
貸付金ヨリ生スル收入	四、一〇〇
繰入金及其他	四、四四二
合計	七八、六四三

而して歳入の主なる財源は税收入である、其の内譯は次の如くである。

昭和九年度一般市税及都市計畫特別税一覽（當初豫算）

市税 区分	豫算額	都市計畫特別税 区分	豫算額
地租附加税	一一四、九一七円	地租割	二〇、四八〇円
特別地税附加税	九三二	營業收益税割	一〇六、五五三
營業收益税附加税	三七五、三六〇	營業税	一四、三八〇
所得税附加税	八一、四七七	雜種税	二〇五、二五六
取引所營業税附加税	六、六四八	家屋税	一七九、九八〇
家屋税附加税	七九八、八九五		
營業税附加税	三二、三五五		
雜種税附加税	三四二、九六八		
特別税戶別税	三、五九五		
同所得税	六六、八六六		
同觀覽税	一九、三五〇		
同段別割	一、一三四		
計	一、八四四、四九七	計	五二六、六四九

市債　本市の市債未償還額（昭和九年四月一日現在）は六百九十一萬八千四百八十六圓である。

事業別に依る市債（昭和九年四月一日末現在）

事業別	未償還額	昭和九年度償還豫算額
水道事業關係	二、三三二、四九五円	
教育事業關係	一、九六二、九二〇	
土木事業關係	一、三五一、八六〇	
都市計畫事業關係	九九五、〇〇〇	八五八、二三〇円
社會事業關係	一九七、一八一	
保健衛生關係	二二、四五五	
産業關係	五六、五七五	
計	六、九一八、四八六	八五八、二三〇

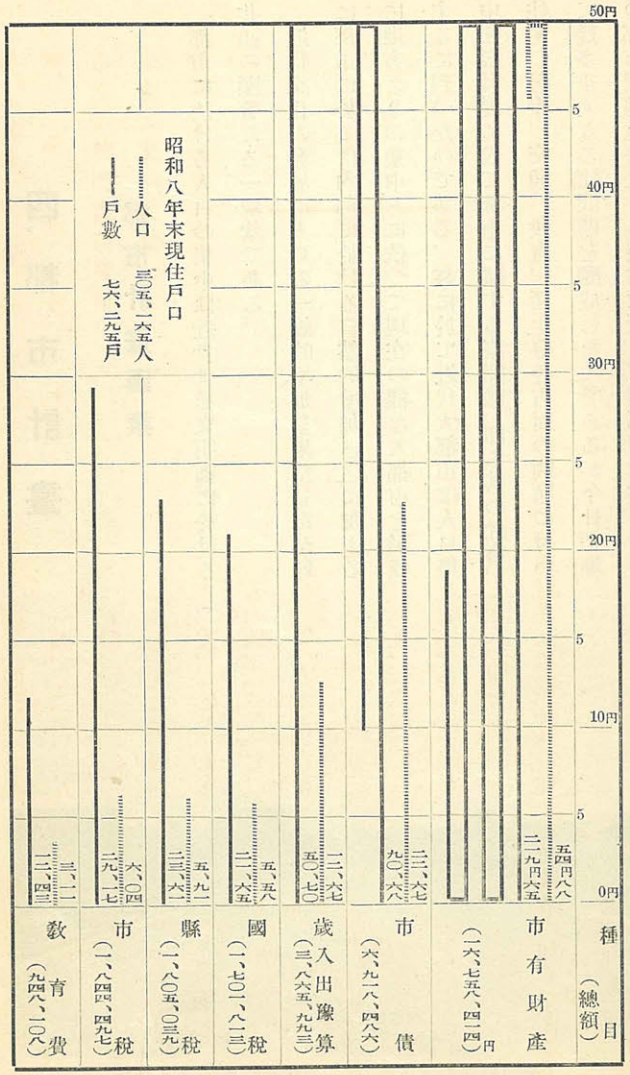
市有財産　本市の市有各種財産は市勢の發展と共に年々增加しつゝあるが昭和九年三月末現在額は次の通である。（×印は昭和八年三月末）

基本財産　八三五、二四一、〇九円

罹災救助資金　四、四〇二、三九
奬學資金　一四、三二三、一五
市立淺野圖書館資金　五〇、〇〇〇、〇〇
公園改良資金積立金　七、九九七、四六
博覽・共進會開催積立金　五、二〇七、七九
×普通財産
　土地　五六四、二六〇、七二（平方米）
　建物（延數）　（六、〇〇六、九九六、六五）（円）
　其他　一六五、二〇八、三三（平方米）
　　（四、二八九、三六四、〇三）（円）
　　五、五〇六、八八一、〇五
計　一六、七五八、四一三、六一

而して本市昭和八年末現住戸口一戸一人當りの市有財産及負擔額其の他を示せば次の如くである。

財産及負擔其他一覽

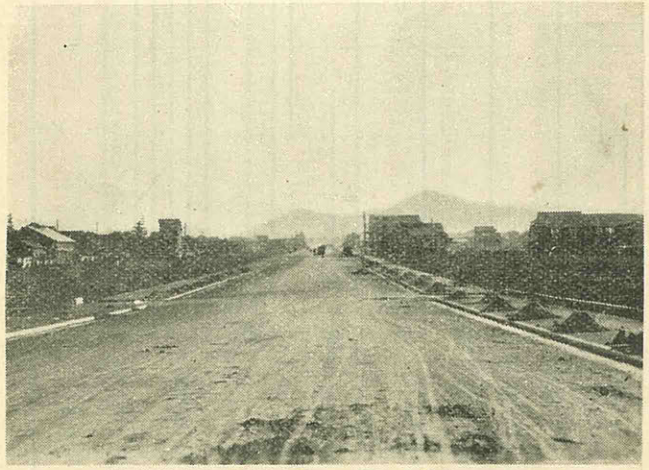


四、都市計畫

都市計畫事業

都市に於ける人口の集中は近世世界文明國に於ける共通の顯著なる一現象である。

近代文化の發展は人口の一般的增加を來たしたが殊に都市に於ては內部に於ける自然的增加と之に加ふるに地方よりの集中とに依つて現在の樣な大都市を形成するに到つたのである、茲に於て近代大都市は人口集中膨脹發展に因て都市に關する諸問題、卽ち其の社會、住宅、勞働、交通、敎育、衞生等各方面の問題に付いて幾多重大なる諸問題を釀成したのであるが今日是等の都市問題を解決する根本政策は所謂都市計畫である



竣功せる的場字品線の一部(陸軍運輸部檢閱濟)

竣功せる觀音町新道路

卽ち都市計畫は都市の秩序正しい發展と、其の近郊を整正せんとする企畫であつて其の目的は市民の健康安寧及福利の增進と產業の進步を助長する爲で豫め一定した統一的な其の計畫に從て都市を建設し又は改善し之を健全に發達させて行くと言ふに外ならないのである。

茲に於てか本市に於ても大正十二年七月都市計畫法の適用を受けることゝなり同十四年一月本市及本市隣接の仁保(一部を除く)、矢賀、牛田、三篠、古田、已斐、草津の七箇町村を包含する都市計畫區域が決定せられたのである、以下其の區域、他區、地域、街路に付き大要を記述するに次の如きものである。

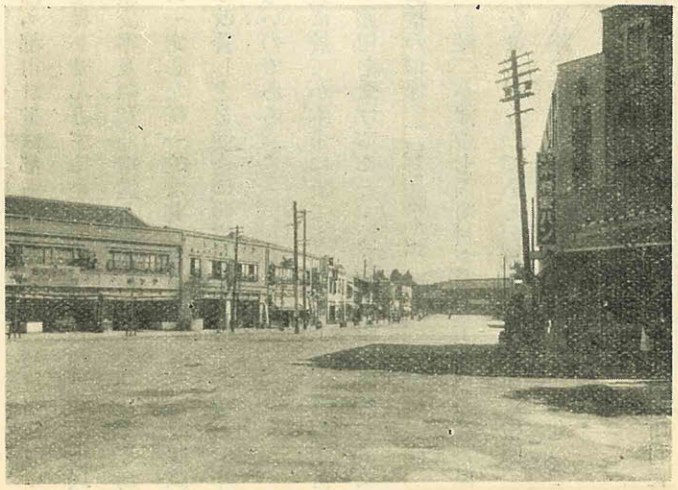
區　域　は前述の如く本市及隣接七箇町村にし

て（昭和四年四月七箇町村は本市へ合併せられた）、廣袤東西一萬二千二百二十七米、南北九千六百一米面積六千九百八十八萬四百二十四平方米（四方里五三）である。

地　區　本市に於ては市街地建築物法に據る地區の指定は現在ないのである。

地　域　都市の分業的組織に依り商業地域（概ね市内中央部）、工業地域（市内東部及南部北部の各一部）、住居地域（概ね前記商工業地域を除いた部分）に分つたもので昭和二年六月指定せられたものである。

街路網　街路計畫に定められた路線は二十九線にして工費約四千萬圓を要し現在一時に之が工事に着手することを許されない事情にあるを以て財政の



鷹野橋附近より千田町通を望む

許す範圍に於て先づ廣島港と廣島驛との船車連絡、近郊新開地と中央部との交通連絡を圖り且近郊新開地に街路の根基を示し、區劃整理の施行と相俟て亂雜不整な市街化を未然に防止する等緊急缺く可からざる路線十三線を選び此の工費八百六十六萬圓（後追加更正せられて千三百萬九千餘圓となつた）にして昭和四年度より同十三年度迄の十箇年（後事業年度は一箇年延長せられ昭和十四年度迄となつた）繼續事業として計畫し昭和五年三月認可を得たものである。

事業施行に決定せる街路の位置は次の通である。

都市計畫事業街路

街路名	幅員	區間
イ、一等大路第三類 第二號線（十日市荒神町線）	二十五米（一部二十二米）	西九軒町ヨリ銀冶屋町ニ至ル及的場町ヨリ荒神町入口ニ至ル（新架橋ヲ除ク）
第三號線（荒神町矢賀線）	二十二米（一部三十米）	前號路線終點ヨリ荒神町蟹屋町界ニ至ル區間
第四號線（十日市已斐線）	二十二米	西九軒町（第二號線ノ起點）ヨリ已斐町ニ至ル區間

第五號線（十日市横川線）	二十二米	西九軒町（第二號線ノ起點）ヨリ横川町三丁目ニ至ル區間	
第六號線（小網町江波線）	二十二米	小網町第四號線ヨリ分岐シ船入町ヲ經テ江波町長通ニ至ル區間	
第七號線（的場宇品線）	二十二米（一部二十米）	的場町第二號線ヨリ分岐シ段原大畑町ニ至リ右折シ皆實町ヲ經テ宇品町市營棧橋ニ至ル區間	
第八號線（船入皆實線）	二十五米（一部二十二米）	大手町八丁目ヨリ南竹屋町及京橋川新架橋ヲ經テ皆實町ニ至リ的場宇品線ニ接續スル區間	
第九號線（船入御幸橋線）	二十二米	皆實町（御幸橋東詰）ヨリ的場宇品線ニ接續スル（專賣局東南側）區間	
第十二號線（廣島驛前線）	二十二米（驛前ニ廣場ヲ設ク）	大須賀町ヨリ第二號線終點ニ至ル區間	
第十三號線（船入梅屋線）	二十二米	觀音町九五二番地ノ一ヨリ同町南七〇四ニ至ル區間	
第十四號線（觀音十日市線）	二十二米（一部十五米）	西觀音町二丁目五間道路ヨリ船入梅屋線ヨリ分岐シ天滿町ニ至ル區間	
第十五號線（觀音町線）	二十二米	觀音町ニ於テ船入梅屋線ヨリ分岐シ二等大路第一類第二號線ニ接續スル區間	
ロ、二等大路第一類第二號線（皆實、東新開線）	二十米（一部二十六米）	船入皆實線終點ヨリ皆實町三ノ割ニ至ル區間	

而して

事業路線延長　一萬九千六百四十四米七二

現在竣功路線延長　六千四百二十三米一八

となつて居る

區劃整理

道路の幹線は都市計畫に依り決定せられて居るのであるが其の支線等に至つては未だ具體的のものなく從て是等に關しては土地區劃整理組合の設立に依り解決を圖るべく郊外地方面に對し該組合の設立を奬勵し現在組合數五組合である。

而して現在造成せられたる區劃整理組合の道路敷は九萬四千三百六十五平方米餘にして、將來着手せられんとする區劃整理組合の道路敷は五萬千二百九十五平方米餘であつて、區劃整理組合が自ら計畫路線を造成して之を本市に無償提供すれば其の面積約十四萬五千六百六十平方米餘となるべく從て郊外計畫路線の大部分は市費を要することなく數年間に實現することゝなるのである。

道路事業

都市計畫街路に對する補助道路として道路改修及鋪裝工事事業があり何れも主として失業應急事業として施行せられて居るのである。

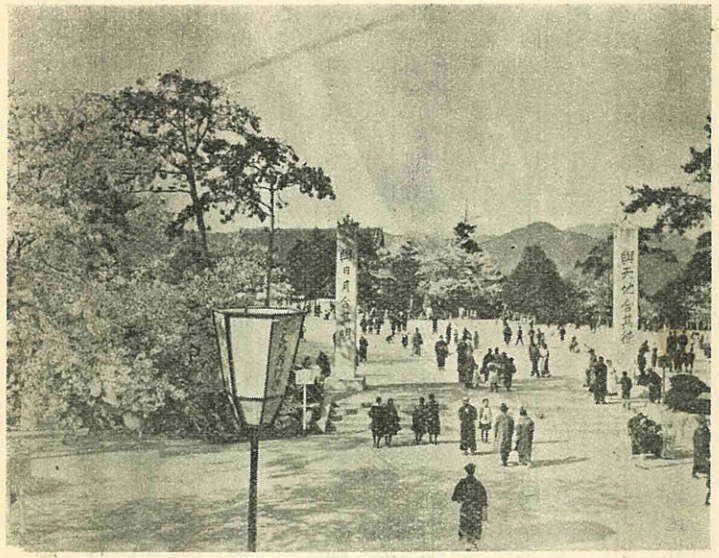
而して昭和八年末現在に於ける失業應急事業の擴築工事道路の延長及幅員は次の通である。

擴築工事	延長	四四、八一〇米
	幅員 九米以上	二、七八〇米
	幅員 五、九米乃至五米	一七、二二〇米
	幅員 三、五米乃至三、七米	一八、六〇三米
	幅員 三、七米以下	六、二〇七米

尙昭和九年七月現在に於ける鋪裝工事道路の延長及幅員は

鋪裝工事	延長	四〇、一六二米
	幅員	二、二二米乃至一、二二米

以上は第一次、同二次、同三次、同四次事業工事であるが之に依つて本市の道路は面目を一新することゝ思ふ。



比治山公園の一部

公園

本市の公園施設は尙擴張し改良を要する點が多く現在之が調査研究を遂げて居る。

現在本市の公園は左の三公園である。

比治山公園　本公園は純然たる山林公園である、其の山容恰も虎の臥したる如き形をして居るので臥虎山の別稱がある、元國有林であつたのを明治三十一年八月本市の公園とするの允許を得たのであるが其の面積は十六萬四千餘平方米であつて滿山老樹蓊鬱として風景最も閑雅なるを以て知られ山嶺は眺望浩濶にして克く全市を双眸に收めることが出來、南方遙に廣島灣を望み宇品、江波の風物を指摘することが出來る、山の北嶺は之を開

いて平地とし舊御便殿及　大正天皇御即位大典記念館を建設し又山上北西に櫻花を植ゑ陽春開花の候には花を賞し銷夏林間の清風に一日の汗を忘れ紅葉秋月を詠むの候には杖を此の地に曳く者跡を絶たず、滿山銀を敷き連樹雪に惱むの風情に至つては蓋し他に其の比を見ない所である。

昭和三年行啓記念事業として公園路改築の工を起し園内御便殿連繩柱の所より蜿々多聞院下に至る道路がそれであつて其の他に廣場及陸橋、兒童遊園地の設備も整へられたのである。

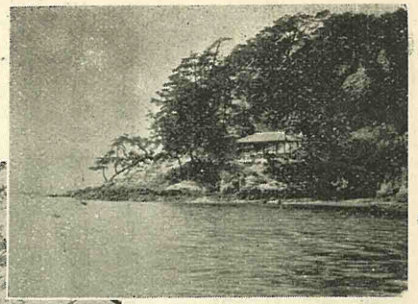
同公園内には陸軍墓地及賴氏の墓所、賴山陽先生顯彰の山陽文德殿等がある、

江波公園　も比治山公園と同じく明治三十一年本市の公園とする允許を得たもので市内江波町に在る、面積三萬四百餘平方米であつて全山古松欝茂し殊に三方を海に繞らし山巔の眺望最も爽快を極め明治三十六年より一般に縱覽させることゝしたのである、而して年々改良を加へ梅、櫻其の他の花卉を植栽し漸次公園としての面目を整へ現在に至つて居る。

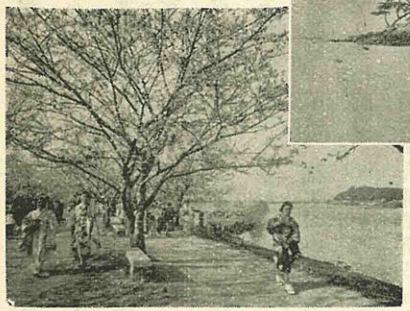
園内に廣島測候所がある

大芝公園　本公園は市内三篠町の東端太田川の清流に沿ふ堤防數町の間に在り面積三萬二千七百餘平方米にして櫻花の候を以て克く知られて居る。

比治山公園の一部



江波公園



大芝公園

五、交　通

道　路

本市街の狀態は所謂城下町にして舊城を中心として形成せられたものである、故に道路も藩政時代の軍略に基

き戰事的加工を施したもの多く短くして屈曲したものが多い。

然るに明治六年河港道路修築規則の制定を見同九年之が改正に依り國道及縣道の區分定まり且同十一年及同十四年各道路築造及改修費の支出方法の制定竝改正を見るに及んで是に市内道路の面目を一新するに至つた。

而して本市は中國の重鎭にして南は瀨戸内海に面し海陸四通八達の要樞に膺り市内を東西に貫通する國道本線即ち東方矢賀町より尾長、愛宕、猿猴橋、京橋、橋本、石見屋、山口、銀山、鉄屋、堀川、平田屋、播磨屋、革屋、細工、中島本、塚本、堺、天滿、福島、己斐、古田、草津各町を經て佐伯郡井口村に至り東は岡山、兵庫を經て東京に通じ、西は下關を經て九州に達して居る、而して革屋町より分岐して北上し師團司令部に至るものとの二線がある、之が幅員は十二米七三乃至九米〇九である。

縣道は四線ある、即ち水主町縣廳より中島新町、元柳町を經て中島本町に至り國道を西に沿ひ更に猫屋町を北上して油屋、十日市、寺町、三篠各町を經て安佐郡祇園村を經て島根縣松江市島根縣廳に至る線と此の線を逆に南下して水主町より大手町八丁目、同九丁目、千田町より皆實町に出て宇品町に至るものと、水主町縣廳前より天神町を經て中島本町に至り國道線に達して東上する線、及牛田町

り大須賀町、猿猴橋町に至り國道線を西に向ひ京橋町を南折して稻荷、土手、段原、皆實各町を經て宇品町に達する各道路がある。

市道は市内を縱横に貫通し其の線は枚擧に遑がない迄に布設せられて居る、而して現在之が國縣市道の延長は七十二萬三千三百三十八米にして面積百八十萬三千平方米である。

而して之が細別は次の通である。

種別	延長	内鋪裝延長	面積	内鋪裝面積
	米	米	平方米	平方米
國道	二、八七五	六、五四二	六九、九七七	五二、三三六
縣道	三五、〇三五		一六六、〇四四	
市道	六七六、七一〇	二五、一八二	一、五六六、九八五	一六六、六四八
計	七二三、六三八	三二、七二四	一、八〇三、〇〇六	二一八、九八四

鐵道、電軌、バス

既設線

國有鐵道　の中山陽本線は元私設であつて山陽鐵道株式會社の施設經營であつたものを明治二十

廣　島　驛

七年六月初めて糸崎驛より本市に開通したものである、而して廣島驛より以西山口縣德山迄は同三十年九月に開通し次で亦下關に達したのである、之實に本州中部の幹線にして東は神戸に於て東海道線に接續し、西は下關に至つて九州鐵道並朝鮮京釜鐵道に連絡して居る、明治三十九年三月鐵道國有法に依り國有鐵道となつたものである、而して市内に廣島、横川、己斐の三驛が在り乘客貨物の輸送甚だ多大なるものがある、

廣島驛を起點とする全國主要都市に至る粁程は次の通である。

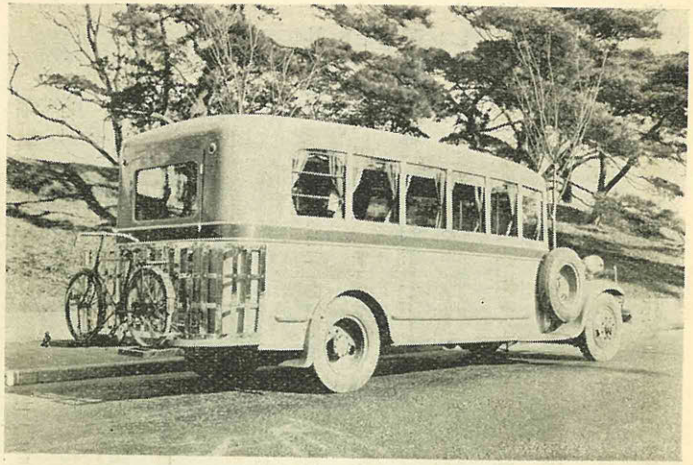
大　阪　迄	三三八、四粁
名古屋　迄	五二八、八粁
東　京　迄	九〇六、五粁
下　關　迄	二二四、〇粁

福　岡　迄	三〇三、〇粁
長　崎　迄	四九一、一粁
鹿　兒　島　迄	六二四、〇粁
敦　賀　迄	四九七、四粁
新　潟　迄	九五三、五粁
青　森　迄	一、六四六、五粁

吳線鐵道　は明治三十六年十二月開通し廣島驛より分岐し廣島、吳兩軍都を結ぶ線であつて粁程二十六粁四、昭和十一年三吳線鐵道が開通すれば廣島縣西沿海部と本市の連絡は最も至便となる。

宇品線鐵道　は明治二十七年八月官命に依り山陽鐵道株式會社の建設したもので、廣島驛より分岐して廣島港に至る線であつて明治三十九年三月國有となる、現在に於ては省營貨物列車の外、藝備鐵道株式會社に於て旅客用ガソリンカーを運轉して居る。

私設鐵道　の中藝備線鐵道は藝備鐵道株式會社の經營にして山陽線廣島驛の東南方に接近して其の起點を設け、安藝郡中山村を經て安佐郡口田、落合、深川、狩留家を過ぎ高田郡三田、井原、坂を經て雙三郡三次に達し更に比婆郡庄原に至る線であつて其の延長九十粁五である、本線は廣島縣東北



廣島濱田港間省線バス

部との連絡機關たるのみならず目下建設中の三神線が完成すれば所謂陰陽連絡上の重要使命を有することゝなる。

本線の内十日市、備後庄原間（二十三粁二）は昭和八年國有となり三神西線と改稱された。

廣濱鐵道　は廣濱鐵道株式會社の經營にして山陽線横川驛附近を基點として安佐郡可部町に至る十三粁八の電氣鐵道にして本縣西北部との重要連絡機關である。

宮島線鐵道　は廣島瓦斯電軌株式會社の經營にして山陽線己斐驛附近を起點として同線宮島驛前に達し連絡船に依り日本三景の一たる嚴島に至る十六粁一の線であつて電氣軌道である。

市内電車軌道　は本市を東西南北に走り粁程十三

粁三にして其の建設經過は次の如きものである。

本線	自廣島驛前 至己斐驛前	五粁一一七	大正元年十二月
常盤線	自八丁堀 至白島	一粁一五二	同　元年十二月
横川線	自左官町 至横川	一粁七七〇（單線）	大正六月十一月
西塔線	自紙屋町 至鷹野橋	一粁三三六	大正元年十二月
御幸橋線	自鷹野橋 至御幸橋	一粁〇六二	大正元年十二月
宇品線	自御幸橋 至宇品	二粁八二六（單線）	大正四年四月

省營廣濱バス　は昭和九年九月開通し廣島驛を起點とし横川より縣道を北上して山縣郡大朝町及赤名峠を經て島根縣濱田港に至る延長百二十粁程を往復して居る、定員三十八名の豪華自動車が沿線を睥睨しつゝ走る樣は實に堂々たるものがある。

市内乘合自動車　は廣島乘合自動車株式會社の經營にして市内の東西南北を七路線に分ち運轉し

て居る、

尚是等交通事業の成績は次の如きものである。

鐵道乘降客

（昭和八年度）

驛名	乘降人員總數 乘車客	乘降人員總數 降車客	乘降人員總數 乘降車一日平均	乘降人員總數 乘降車一日平均	乘客運賃 一箇年	乘客運賃 一日平均	入場券發賣 枚數	入場券發賣 金額	小手荷物 發送	小手荷物 到着
廣島	二、四〇八、三三九人	二、六五一、四六一人	六、五九八人	七、二六四人	一、六六四、二二九円	四、五五九円	二六五、一二七枚	二六、五一三円	四九六、五一二箇	五二二、二九七箇
己斐	三五〇、二八八	三六三、七〇九	九六〇	九九六	二四六、二三二	六七五	三二、五九五	一、二三〇	五九、六〇三	三一、八八三
横川	一二〇、三五六	一〇五、七七九	三三〇	二九〇	一一〇、六六三	三〇三	一〇、三〇三	五一五	三五、五一七	二八、〇七七
東廣島	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
宇品	一四〇、九八八	?	?	?	五、〇一三	?	—	—	—	—

鐵道貨物

（昭和八年度）

驛名	發送貨物		到着貨物
	瓲數	運賃 金	瓲數
廣島	五五、三六〇瓲	四四四、三五六円	七三、三九〇瓲

電車乘客

（昭和八年度）

線名	使用車輛數	運轉粁數	乘客數	乘車賃	一日平均 運轉車輛數	一日平均 運轉粁數	一日平均 乘客數	一日平均 乘車賃
己斐	二二、一四四	一三五、一六六	五三、二六四					
横川	二〇、〇〇三	一六八、一七五	三六、九四六					
東廣島	四、二六五	九、〇九七	六〇、八四二					

乘合自動車乘客

（昭和八年度）

線名	使用車輛數	運轉粁數	乘客數	乘車賃	一日平均 運轉車輛數	一日平均 運轉粁數	一日平均 乘客數	一日平均 乘車賃
市内線	一五、一四〇臺	二、七一〇、一二〇粁	三、一四五、八一三人	二四、八〇五円	一〇臺	四九七粁	? 人	? 円
市外線 宮島線	二七、〇八六臺	四、三九三、二〇八粁	三、五三七、八一六人	一、〇五九、三八〇円	七五臺	一七五粁	六一、七七二人	二、八九九円
市外線 廣濱線	二、三五八	五七五、〇九一	一、〇一三、四二四	二、九〇七、一五三	九	二、八〇〇	七、九六六	八一三
市内線	三、三四七	一、一七九、九五五	二、九〇七、一五三	一四一、五二三	六	一、五七六	三、二三三	三八七

未成線

廣島、本郷線　は廣島市と島根縣濱田町を連絡する鐵道の一部たる線であつて、昭和八年四月より前述廣濱鐵道の終點可部驛附近を起點とし着工せられ目下工事中で昭和十四年度完成の豫定である、全區間六十粁本縣西北部との連絡に當つて居る。

三神線　は前述藝備鐵道三次町と、伯備線（備中倉敷より伯耆米子に至る）備中神代を結ぶ線にして十日市（三次町の内）、西城間神代、東城間は既に開通し東城、西城間が殘されて居る、昭和十二年度全通の豫定で其の曉に於ては廣島市より藝備鐵道を經て本線に依り伯備線と連絡し山陰線に結び所謂陰陽連絡の一方の目的を達する譯である。

落合、木次線　は山陰線宍道驛より分岐して木次に至る簸上鐵道の終點木次と前述三神線の中間驛落合を連絡する線にして木次、出雲三成間は既に開通し昭和十一年度全線開通の豫定である、蓋し三神線に先んじて陰陽連絡の使命を果す重要線である。

三江線　は藝備鐵道三次と山陰線石見江津を連絡する線にして江津、石見川越間は既に開通し全線開通は昭和十四年度の豫定であつて本線も亦陰陽連絡の使命を有して居るものである。

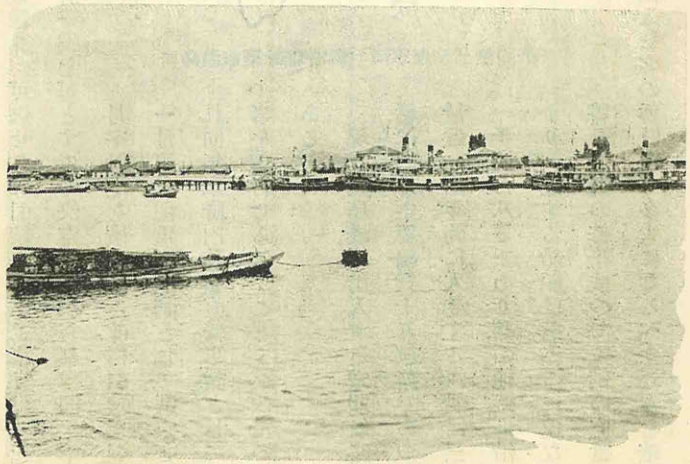
廣島港

本港は市の南東にあつて瀬戸内海の西北に位して居る。

明治二十二年十一月宇品築港が竣功し引續き明治二十七八年の日清戰役を契機として軍事上の利用を見るに及び一般貨客も增加し爲に設備も逐年面目を改め現在に至つたものである。

現在港灣の水面積四百四十萬二千九百六十坪、水深二十尺乃至三十尺となつて居る。

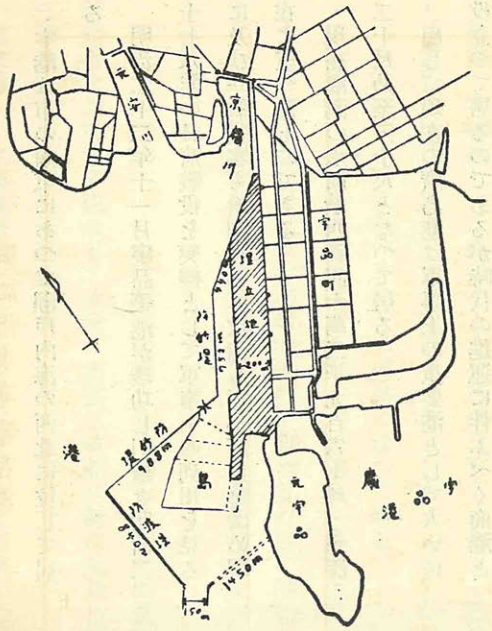
而して現在の廣島港は軍事上の重要港として大いに役立つて居るのであるが時代の進運に伴ふべく商港としては尙一段の發展を爲さねばならぬ必要があるので港灣修築計畫が生れ昭和五年廣島縣會に於て從來の宇



廣島港（陸軍運輸部檢閲濟）

品港の西方海面に工費三百五十萬圓を以てする港灣修築豫算が可決せられ引續き之が工事計畫及起債認可申請をし、昭和七年八月臨時港灣調査會に於て該計畫案を可とするの決定を與へられ、同年十二月宇品港を廣島港と改稱引續き翌年一月第二種重要港灣として選定せられ同年以降内務省直營事業として工事を施行せらるゝことゝなつたのである。

現在廣島港に出入する定期航路汽船は内外主要線三十五航路であつて最近一箇年間に入港する汽船は三萬一千四百八隻であり其の他近海沿岸より入港する船舶は數ふるに遑なく將來港灣の修築成つて設備の充實、各種機關の整備と相俟つて船舶航路は益々各地に開け出入貨客の呑吐益々多大になるべきことを確信



廣島港修築計畫略圖（陸軍運輸部檢閲濟）

するものである。

廣島港乘降船客表（昭和八年）

航路別	乘込人員	上陸人員	合計
外國航路	三一二人	五四八人	八六〇人
内國航路	四五五、六三六	四二三、〇六六	八七八、七〇二
計	四五五、九四八	四二三、六一四	八七九、五六二
前年分合計	四二〇、〇四二	四二八、〇五〇	八四八、〇九二

入港船舶表（昭和八年）

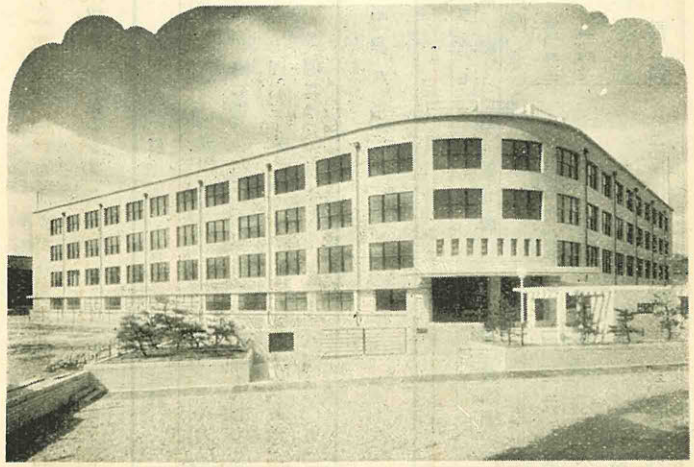
種別	汽船 船數	汽船 登錄噸數	帆船 機關ヲ有スルモノ 船數	帆船 機關ヲ有スルモノ 登錄噸數	帆船 機關ヲ有セザルモノ 船數	帆船 機關ヲ有セザルモノ 噸數	帆船 石船 船數	帆船 石船 噸數	帆船 舟數	帆船 石數	合計 船數	合計 登錄噸數
貨客船	三六、八三〇	三、〇四八、四五三	八、六二三	二〇八、五三一	二、七七六	三三、三一二	八五	六、八八五	四八、三三四	三、二九〇、九八五
漁船	三三	二五六	—	—	二四三	一、四五二	一六	八〇〇	二九〇	一、七八八
避難船	—	—	五	一五五	八	二一〇	一	八〇	一四	二八三
計	三六、八六三	二、〇四八、七〇九	八、六二八	二〇八、六八六	三、〇三六	三四、八八四	一〇三	七、七六五	四八、六二八	三、二九三、〇五六

通信

郵便　市内に於ける郵便局は四十六局を算へ其の内一等局は一、二等局三、三等局四十二である、近年交通機關の發達に伴ひ經濟取引其の他一切の郵便事務激增し昭和八年度一箇年間の取扱數は市内引受通常郵便物五千四百五十二萬千二百四十四通、同配達郵便物四千八十九萬六千三百八十七通であつて此の外集金郵便物引受十一萬四千七百七十六通、同配達三萬千十五通となつて居る。

而して小包郵便物の引受數は六十一萬六千三百十二箇、同配達數四十三萬千二百四十七箇となつて居る。

電信　市内に於ける電信取扱局所は十六となつて居り昭和八年度一箇年間に取扱ふ電報發信通數は六十一萬四千七百二十五通にして其の内、内國電信は六十一萬二千四百五十九通、外國電信二千二百六十一通、同着信通數は五十九萬四千七百七通にして其の内、内國電信五十九萬千八百二十九通外國電信二千八百七十八通となつて居る。



廣島遞信局

電話　市内に於ける電話取扱局所は合計十二にして其の内交換取扱局所は二、通話取扱局所は十となつて居る、昭和八年度現在の加入者總數は六千九百六十人にして加入區域内の電話機數は六千九百五十六箇、公衆電話三十五箇を算へて居る。而して昭和八年度一箇年間の交換件數は加入者間交換五千二百五十三萬二千八十六件、非加入者交換二十六萬六千四百三件となつて居る。

郵便（昭和八年度）

	通常郵便			小包郵便		
	引受	配達	計	引受	配達	計
普通	五三、八七四、〇六六通	四〇、二六〇、六七〇通	九四、一三四、七三六通	三八四、三八四通	二七五、八三三通	六六〇、二一七通
書留	六二三、〇九〇	六三五、七一七	一、二八二、八九三	二三一、九二一	一五五、四一四	三八七、三四二
價格表記	二四、〇八六			七		
計	五四、五二一、二四四	四〇、八九六、三八七	九五、四一七、六三一	六一六、三三三	四三一、二四七	一、〇四七、五五九

電信、電話（昭和八年度）

	發信	着信	計								
電報 内國	六二、四五九	五九一、八二九	一、二〇四、二八八	電話 市内	五一、一九五、九九五	一八〇、四七〇	一、〇一五	五三、五三二、〇八六
電報 外國	二、二六一	二、八七八	五、一三九	電話 市外	一、三三六、〇九一	八五、九三三	一五、六一二	一、四三七、六三六
計	六一四、七二〇	五九四、七〇七	一、二〇九、四二七	計	五二、五三二、〇八六	二六六、四〇三	一六、六二七	五三、九六九、七二二

六、産業及經濟

本市の商工業は天正年間毛利輝元の開府以來代々の藩主が鋭意殖産興業に志したゝめ維新前既に中國に於ける中心地として國内産業上重きをなして居たのであるが維新以後資本主義經濟組織の浸潤するに伴ひ本市の良好なる位置、好適なる氣候、完備せる交通、豊富なる材料、低廉なる勞賃等諸種の素因は本市の産業をして急速に發展せしめたるのみならず特に商工業は數度の大戰を始め幾多事變の刺戟を受けて今日の隆盛を至したのである、而して今や本市は中國産業上經濟上の一大中心地として重きを爲して居るのみならず將來廣島港の完成、太田川修築竣功と相俟て今後の發展は其の勢眞に測り難いものがあるのである。

今本市産業各部に亙り梗概を記せば次の通である。

蓮根畑

農業

農業　本市商工業の發展と區劃整理の進展に伴ひ耕地は漸次宅地、工場敷地、道路等に變更され農産物の作付段別も亦逐年減少を示して居るのである、即ち昭和八年末に於ける本市の耕地面積は千五百七十七町四段歩であつて、本市が隣接七箇町村の併合を行つた昭和四年末の耕地面積千七百五十五町歩に比較すれば實に百七十六町六段歩一割弱の減少に當るのである。

此の耕地面積の減少に伴ひ漸次農專業者は兼業に、兼業者は他業に轉ずる傾向がある外時代に適合した集約的農業經營の組織に變更する者を生ずる氣運をも醸成して居るのである、今昭和八年中に於ける農産物の狀況を一瞥するに米收穫高九千六百三十石、價額十九萬四千二百五十圓、麥收穫高一萬二千七百六十二石、價額十四萬八千三百四十七圓であつて、米麥以外の農産物として花卉、果實、工藝促成栽培品、雜穀類等が主なるものであつて是等農産物の價額は總計三百十萬四千四百九十四圓に上つて居る。

畜産業

牛馬豚　昭和八年中生産したる牛は百六十八頭にして其の内牡七十六頭、牝九十二頭である、豚の生産

胡瓜畑

温室栽培の實況（メロン）

は四百二十八頭にして其の内牡二百三十二頭、牝百九十六頭であり、牛乳の搾乳高は四千三百五十九石、價額十七萬四千三百六十圓である。

而して昭和八年末現在市内に於て飼育する牛馬豚數は牛七百三十五頭、馬七百四十七頭、豚七百九十八頭、山羊四十三頭となつて居る。

水産業

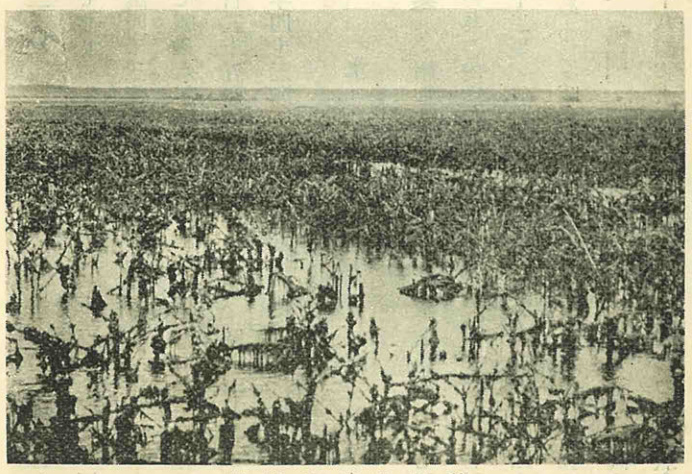
水産業　昭和八年末に於ける水産業戸數は千七百八十六戸其の内漁撈業者二千百七十五人、漁船は有動力船三十二隻、無動力船千六百九隻、合計千六百四十一隻であつて昭和八年中に於ける水産額中漁撈物は鰯、鯖、黑鯛、鰯類及貝類等各種に亙り五十四萬六千四百十八圓、水産養殖は牡蠣、海苔、其の他小魚介

類七十八萬九百二圓、合計百四十二萬七千三百二十圓である。

工　業

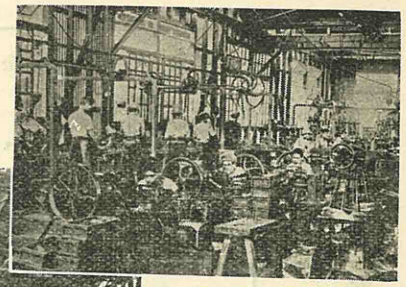
工産物　本市の工業は本市の位置、氣候、電力、勞力等の諸條件の完備と相俟て逐年發展の一路を辿り工業形態は多種多樣に上り本市都市計畫上の道路其の他工業助長の諸施設と共に其の前途は各方面より注目の的となつて居るのである。

而して昭和八年末現在に於ける工場數は常時職工五人以上使用のもの五百六十七工場同職工數一萬二千三百二十四人である、昭和八年中の工産額は六千九百十二萬四千五百七十一圓であつて之を工業別に觀れば最多額を占むるものは纖維、染織工業であつて人造絹



牡蠣養殖の實況

罐詰工場



製針工場

糸、綿糸紡績、製綿、晒及染物、洋服等を主なるものとし、第二位は飲食品工業であつて精米、罐詰、菓子類、清酒、清凉飲料水を主なるものとし、第三位は機械器具工業で造船、縫針等を主とし、第四位は化學工業であつて護謨製品、賣藥、諸油類等を主とし次いで其の他雜工業の順位となり其の總額は

纖維染織工業	一七、五七二、二七四圓
飲食品工業	一四、四四九、一七八圓
機械器具工業	九、一三四、一三七圓
化學工業	五、八七五、七八五圓
雜工業	二一、四六三、九二〇圓
特別工業	六六四、三七七圓
合計	六九、一二四、五七一圓

である、其の內主要なるものを擧げれば次の通である。

種別	價額	種別	價額
人造絹糸	五、七二四、五〇五円	藥	一、三九五、〇〇〇円
精米	五、五三八、三一〇	菓子類	一、二七六、九五〇
綿糸紡績	四、四三五、七三〇	晒及染物	一、一六八、七六七
印刷類	四、一八五、一三〇	船底塗料	五二五、九〇〇
防腐木材	三、六二三、八〇〇	人造砥石	一八九、七五〇
金ペン	三、二四九、四〇〇	コルク製品	一三一、八〇〇
指物類	三、一四九、二〇〇	縫針	九〇三、一七五
罐詰	三、〇四〇、七五四	板紙	四二二、五二五
洋服	一、九八〇、〇〇〇	鑄物	三〇八、四三四
製綿	一、八九七、八七五	綿織物	二九六、〇一六
護謨製品	一、五六七、八八〇		

職工及勞働者平均賃銀　昭和八年中に於ける各種業態に付き賃銀騰落の經過を觀るに業態五十一種の內前年に比し騰貴したるものは二十三種、保合のものは四種、低落したるものは二十四種である。

更に本市昭和八年の勞働賃銀指數を月次に示せば（大正十年十二月平均一〇〇トス）

一月	八三、二七	二月	八四、五五
三月	八五、四一	四月	八三、九五
五月	八三、四八	六月	八五、〇五
七月	八五、七九	八月	八三、一四
九月	八四、三六	十月	八四、〇六
十一月	八四、五〇	十二月	八五、四一
全年	八四、四一		

にして更に前三箇年を比較すれば

昭和七年	八四、一四
同六年	八三、七四
同五年	九一、七六

である。

而して其の主要勞働者の平均賃銀は次の通である。

平均勞働賃銀表（昭和八年）

種別	賃銀	種別	賃銀
製糸女工	円 七三	罐詰工	円 一、三五
綿糸紡績女工	六六	飲料水製造工	一、一〇
製綿女工	六二	製材（機械挽）工	一、八一
旋盤工	三、七七	活版植字工	二、五八
仕上工	三、七四	雨傘製造工	一、〇五
縫針製造工	一、五五	大左官工	一、八〇
製革工	一、一九	煉瓦積工	二、一八
燐寸製造男工	一、〇八	煉瓦積工	二、〇〇
燐寸製造女工	二、四八	疊刺職	一、八三
護謨製造男工	二、二七	指物職	一、二七
護謨製造女工	一、〇二	下駄職	一、三二
清酒醸造工	一、七六	靴工	一、五〇
醤油醸造工	一、八二		
菓子製造工	一、一三		

洋服仕立職人	一、七七	金ペン製造工	一、五三
夫男	一、四九	硝子吹工	一、〇二
女	六五		
仲仕	二、一九	煉瓦製造工	一、二一
下男	一二、五〇	和紙製造工	一、四七
	（月給賄付）		
下女	九、八三	洋紙製造男工	一、七二
	（同）	洋紙製造女工	九三
莫大小編男工	一、〇五	漆器塗師	一、五〇
莫大小編女工	一、五一		
足袋製造男工	一、八一	搾油工	一、五〇
足袋製造女工	七七		
木型工	三、五八	製瓦工	一、四〇
鑄造工	三、五六	製本工	一、六四
銀冶工	三、一〇	製菓工	一、一九

電燈電力及瓦斯　本市に於ける電燈電力及瓦斯事業は昭和八年末に於て電線路長は二百六十七粁三に達し、電燈引用戸數は六萬二千四百九十六戸、燈數三十萬七千三百九十五燈、點火料收入百八十九萬百四十圓であつて、電力は使用戸數千九百五十三戸、馬力數は八千五百八十九、電力料收入は百二十八萬五千六百十五圓に達して居る。

又瓦斯は瓦斯管延長六千二百四十五粁七八、引用戸數一萬四千五百九十六戸にして内燈火引用五千九百七戸、燃料引用一萬四千五百九十六戸、機械引用六戸にして之が使用料金は四十二萬五千百三十九圓であつて逐年減落の歩調を辿つて居る。

電燈電力使用累年比較

年次	線路長	線條長	供給電氣量	電力使用 戸數	電力使用 馬力	電力使用 一箇年電力料	電燈使用 戸數	電燈使用 燈數	電燈使用 一箇年燈火料
昭和四年	二二七粁	一、五七七粁	五四、九〇六、〇〇〇キロワット	一、八〇三戸	八、九八三馬力	一、〇〇三、〇〇〇円	六〇、四一〇戸	二七二、四七三燈	一、七六〇、五〇〇円
同五年	二一九	一、三一七	五五、一三三、三〇〇	一、七六三	八、八〇九	一、〇一九、五〇〇	六〇、〇六〇	二八四、一五六	一、七九二、五〇〇
同六年	二四八	一、六九八	五四、〇二三、一三〇	一、八四七	七、九五三	一、一八八、五七四	六〇、一〇五	二九六、七四四	一、八四五、四三一
同七年	二五〇	一、七二六	五五、九三〇、八九七	一、九六一	八、三八五	一、一一九、〇五九	六〇、一八五	二九一、〇一一	一、八七〇、三三三
同八年	二六七	一、八四〇	六二、四〇四、二五〇	一、九五三	八、五八九	一、二八五、六一五	六二、九九六	三〇七、三九五	一、八九〇、一四〇

瓦斯使用累年比較

年次	瓦斯管延長	瓦斯供給高	瓦斯使用料金	燈火引用 戸數	燈火引用 燈數	燃料引用 戸數	燃料引用 口數	機械引用 戸數	機械引用 臺數	機械引用 馬力
昭和四年	五、九六六、六一粉	五、四四二、八四七立方米	五〇六、六八八円	一〇、七一七戸	二九、九六五燈	一四、一九〇戸	三七、四〇三口	三	六	三九〇
同五年	六、二四一、六三	五、四七八、四四八	四九七、四〇八	一〇、五四三	二九、〇五七	一四、六二七	三〇、七〇七	三	六	三九〇
同六年	六、二七四、四四	五、七六六、三八五	四七五、四三九	一〇、五〇〇	二七、八二七	一五、〇八五	四〇、四一三	三	六	三九〇
同七年	六、三三三、四〇	四、六八一、二九一	四三三、三〇一	六、四五八	二五、八三三	一五、〇八六	三九、八九九	六	六	三九〇
同八年	六、二四五、七八	四、六四六、四四〇	四二五、一五四	五、九〇七	二三、六三〇	一四、五九六	三九、七二一	六	六	三九〇

商業

内國商業 中國交通の要路を占めた本市は往昔より百貨の輻輳地として知られて居るのであるが往時は水運を主とし陸運に據るものは僅少であつたのである、然るに明治二十七年山陽線鐵道が開通し（糸崎、廣島間は明治二十七年六月、廣島、德山、下關間は明治三十年九月開通）而して日清戰役の餘波を蒙り海陸共に出入貨物の激增を觀るに至り爾來交通機關の發達と共に益々其の數量を增加しつゝあるのである。

即ち昭和八年中に於ける貨物出入總噸數は海運百三十三萬六千五十五噸、陸運七十萬六千八百十八

噸に達し、前年に比し海運は實に四十八萬千二十三噸、陸運六千八百二十八噸の各增加を示して居る。

今之を海陸出入別に觀れば海運は出貨四十七萬四千九百五十六噸、入貨八十六萬千九十九噸であつて差引三十八萬六千百四十三噸の入超過である。而して取引主要品は穀物、飲食品、肥料、藥品類、金屬製品、枕木等である。

廣島港貿易總額　昭和八年中に於ける廣島港貿易額は內國取引一億四千九百七十八萬二千三十九圓、外國貿易六百一萬五千七十七圓、合計一億五千五百七十九萬七千百六圓に達して居る、之を輸移出入別に觀れば內國取引は移出五千四百二十六萬二千八十四圓、移入九千五百五十一萬九千九百五十五圓であつて外國貿易は輸出百六十五萬七千五十六圓、輸入四百三十五萬八千二十一圓であつて差引二百七十萬九百六十五圓の入超過である。

輸移出入累年の增減は次の通である。

移出入額

年次	移出額	年次	移入額
昭和四年	七、〇三三、一九五円	昭和四年	一〇、九七四、二四七円
同五年	二六、一八一、九六四	同五年	四九、三二八、二三四
同六年	二九、八〇〇、四四三	同六年	四六、七八五、二三六
同七年	二九、二〇二、五〇五	同七年	四七、八一五、六四二
同八年	五四、二六二、〇八四	同八年	九五、五一九、九五五

輸出入額

年次	輸出額	年次	輸入額
昭和四年	四一六、九一六円	昭和四年	四、八六七、九六三円
同五年	三七三、五〇七	同五年	四、〇一八、五三八
同六年	三三二、八四七	同六年	三、一五一、四七二
同七年	六〇五、八七七	同七年	二、七九八、七三〇
同八年	一、六五七、〇五六	同八年	四、三五八、〇二一

株式取引所　廣島株式取引所に於ける昭和八年度中の取引高は次の通である。

長期	出來高	五一、三一〇株
		八、一五七、二〇三圓
	受渡高	五九〇株
		六八、六五〇圓
短期	出來高	一六、四二二、一四〇株
		二、〇〇三、七一二、〇七六圓
	受渡高	一、〇八六、二八〇株
		九二、六四八、三三〇圓

卸賣物價　本市内に於ける卸賣物價平均指數を觀るに昭和八年中百四十五種の物價平均指數は八七、〇八（昭和四年平均價格を一〇〇として）であつて前年に比し一一、一七の騰貴を示して居る。而して之を月別に觀るに

一月	八九、九七	二月	八八、五五
三月	八六、一四	四月	八五、一〇
五月	八四、七七	六月	八五、八二
七月	八六、八八	八月	八五、八八
九月	八八、〇一	十月	八八、四七
十一月	八八、〇〇		
十二月	八七、三三		
全年平均	八七、〇八		

累年に比較すれば次の如くである。

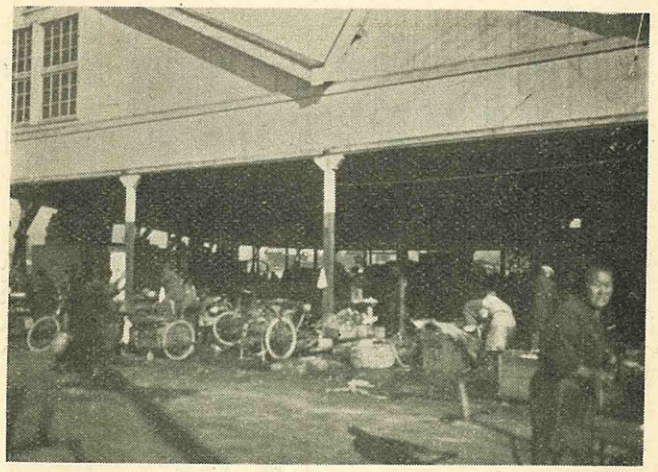
昭和八年	八七、〇八
同　七年	七五、九一
同　六年	七一、八九
同　五年	八四、五八

小賣物價　昭和八年中の平均指數を觀るに百四種の平均指數は八九、七三を示して居る。（昭和四年平均指數一〇〇として）、前年に比して六、八七の騰貴となつて居る、之を種類別に觀ると

食料品	九一、一〇	前年に比し	五、〇五	騰貴

本通筋

衣料品及身廻品	八三、一九	
前年に比し	九、三六	騰貴
燃料	九一、五八	
同	六、九三	同
建築材料	一〇三、二三	
同	一一、三〇	同
雜品	八五、一一	
同	九、七四	同



廣島水産株式會社市場

市場　從來本市内に存在する日需品の市場には、卸賣市場に廣島水産株式會社市場、草津、仁保、日宇那各魚市場、新市、荒神、大手町各青物市場及卸小賣市場に天滿舊市場があり小賣市場には大正昭和市場以下九市場があり、其の販賣品目は市場名の示す如く、唯小賣市場に於ては食料品及雜貨を主として居る、而して其の賣揚總額は昭和八年中六百九十萬六千九百四十九圓を收めて居る。

尙此の外に公設小賣市場六市場あるも市營事業の欄に於て記述することゝする。

産業關係市營事業　本市々營の産業關係事業に次の如きものがある。

屠場　は本市福島町福島川河畔に在つて其の取扱に係る昭和八年中の屠殺件數は次の通である。

屠場屠畜成績（昭和八年中）

區分	成牛	犢牛	馬	豚	山羊	計
頭數 牝	二、五九八	三	一九	一、三五五	一	三、九七六
頭數 牡	一六、〇一三	六〇	二四三	一、二九〇	—	二三、八〇〇
頭數 計	一八、六一〇	六三	二六二	二、六四五	一	二七、七七六
牝 數量	一三二、〇六三〇	五三	六、九八	五〇、三三一	四	一五三、一四九
牝 價格	三六、七六一円	一三六	八〇三	三九、六四六	三	二七七、三四九
牝 單價	二、五五〇錢	二、五五	一、一五	一、九五〇	八〇	—

肉量											
牡				計							
數量	價格	單價	數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格	
八六一、五七一〆	一、八七八、三三五円	二、一八錢	九九三、六三四〆	二、二四、九八六円	七二一	一、五七二	一、一〇八	一、七〇八	一九、三六〇	三三、一三八	七一、七八四
一〇、三八四	一一、四二三	一、一〇〇	一、〇八二	一二、二三三							
—	—	—	四	三							
一、一五〇、一三五	二、五一七、三三二	—	一、三〇三、二八四	二、八九四、六八一							

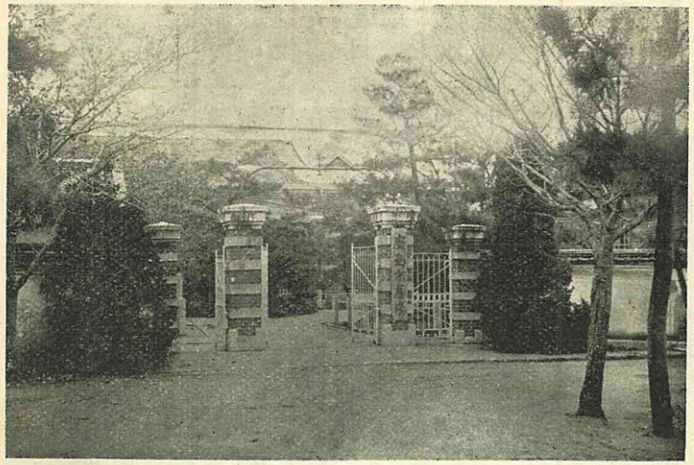
家畜市場

本市の家畜市場は常設にして其の一箇年間の成績は次の通である。

家畜市場成績

（昭和八年中）

種別＼頭數及料金	牛		馬		犢		合計	
	頭數	使用料金	頭數	使用料金	頭數	使用料金	頭數	使用料金
賣買	三〇、〇八二頭	三〇、二三、〇〇円	一頭	一六、〇〇円	一三頭	一五、六〇円	三〇、一〇六頭	三〇、一五四、六〇円
交換	—	—	二	三、四〇	—	—	二	三、四〇
退場	八四四	二一、〇〇	一	、二五	二	、三〇	八四七	二一、五五
宿泊	四、四八四	四八四、四〇	—	—	—	—	四、四八四	四八四、四〇
合計	三五、四一〇	三〇、八一八、四〇	一四	一九、六五	一五	一五、九〇	三五、四三九	三〇、八五三、九五



屠場

常設家畜市場

公設市場　本市公設市場は小賣市場にして大正九年物價最高騰時代に之が應急施設として開設したのに始り現在に於ては六市場が在る、其の成績は次の通である。

公設市場成績　（昭和八年中）

市場名	開設年月	指定商人數	店舗使用料	賣場金額
東松原公設市場	大正九年五月	一五人	三五一円	三〇、七五六円
大手町九丁目　同	同　年六月	一二	四八七	四四、三七六
河原町　同	同　年八月	一六	四二三	五一、八八二
天神町　同	同　十二年十二月	九	二三三	三〇、六四七
段原町　同	昭和二年五月	一一	二七一	三九、七四一
荒神町　同	同　年六月	二	一四四	五二五
計	—	六五	一、九〇九	一九七、九二七

宇品棧橋　市營宇品棧橋は元會社經營であつたものを大正十一年七月五萬三千圓を以て買收經營し現在に至つて居る、而して其の成績は次の如くである。

市營宇品棧橋成績　（昭和八年中）

通行人員	三三一、一一七人	料金	一一、八五九圓
入場人員	四六、五六一人	同	一、八六一圓
貨物	一九九、六〇二箇	同	二、〇三一圓
繫船	一〇、五七二隻	同	二、九五四圓
	（一、八五四、八六九噸）		

尙此の外に共同荷揚場及起重機、上屋等があつて各相當の成績を擧げつゝある。

組合

昭和八年度末に於ける本市各種組合は工業組合八、商業組合九、同業組合十七、同聯合會二、產業組合二十五、酒造組合一、畜產組合一、同聯合會一、蠶種業組合二、同聯合會一、水產組合二、漁業組合十一、同聯合會一、準則組合八あり、此の加入人員は工業組合二百十四名、商業組合七百七十八名、同業組合一萬七千四百二十八名、產業組合一萬四千一名、酒造組合三百七十三名、畜產組合三十八名、水產組合千三百七十九名、漁業組合二千二百十六人、準則組合九百七十八名に上り何れも相當

の成績を擧げて居る。

産業組合の事業　昭和八年度中に於ける本市内信用組合の事業を觀るに貯金に於ては年度内受入三千二百二十九萬六千四百七十一圓、拂戻三千百八十萬五千五百六十四圓、年度末現在高千二十七萬九千三百三十八圓となつて居り同貸付金に於ては年度内貸付千四百三萬二千九百六十五圓、同償還千四百三十萬五十一圓、年度末現在高六百三十一萬九千八百九十圓となつて居る。而して手形割引に於ては年度内割引四十九萬七千百七十三圓、同決濟高三十七萬七千二百五十六圓、同現在高十七萬七千百十三圓である。

購買販賣事業を觀るに組合數十一、組合員數四千八百七十二名、購買總額百三十九萬三千九圓、同販買總額八萬七千五百五十四圓となつて居る。

會　社

會　社　昭和八年中に於て本市内に設立せられた會社は八十五會社であつて其の資本金總額は一千六百八十六萬七千三百七十圓である。之を種類別にすれば商業會社最も多く六十二社に上り之に次いで工業會社十七社、雜會社二社、運輸交通會社二社、金融會社二社の順位となり又資本金額に於て

は工業會社の千五百六十九萬三千五百八十圓が最も多く之に次いで商業會社の九十三萬五千七百九十圓、金融會社二十二萬二千圓、運輸交通會社八千圓、雜會社八千圓の順位となつて居るのである。

更に昭和八年末現在に於ける本店會社數は六百七十八會社にして之を組織別にすれば株式百七十二社、合資四百一社、合名百五社であつて全體を前年に比較すれば前年中解散又は他へ移轉したるもの九十三會社であつて差引七會社の增加となつて居る。

而して現存會社を營業別にすれば商業四百五十四社、工業百六十九社、運輸交通業二十一社、金融業十二社、雜業二十二社であつて此の資本金總額は一億七千八百九萬三千八十三圓、拂込額九千九百五十一萬五千九十七圓、諸積立金千五百四萬八千五十九圓となり是等會社の最近一箇年間に於ける營業成績は純益金九百二十六萬八千四百六十八圓、純損金八十四萬一千三百八十一圓となつて居る。

銀　行

昭和八年末現在に於て本市内に本店を有する銀行數は普通銀行一、農工銀行一、貯蓄銀行一、此の資本金二千三百二十萬圓、拂込額八百七十六萬四千百圓、諸積立金百二十萬圓（昭和八年）を算して居る、市内に本店を有する上記銀行の支店數は十六を算へ市内に本店を有せないものゝ支店十三であ

住友銀行支店・藝備銀行

つて銀行總數三十二行に達して居るのである。

銀行預金　上記各銀行昭和八年中の取扱に係る預金は預入總額十億五千三百三十三萬五千五百二十四圓、拂出總額十億三千四百三十一萬五千百五十三圓、年末現在高一億三千三百四十六萬五千九百二十九圓であつて、前年に比し千五十七萬八千九百九十五圓を增加して居る。

銀行貸出金　昭和八年中に於ける上記各銀行の貸出金總額は四億三千六百三十三萬千七百五十一圓、年末現在高六千二百萬千七百八圓であつて、前年に比し千二百五十七萬二千五百八十七圓を增加して居る。

貯蓄預金　上記預金中貯蓄銀行預金昭和八年中取扱に係る預入總額は八百八十九萬四千二百五十二圓、拂戻總額八百十二萬五千五百七十八圓、年末現在高千二百七十八萬九千八百二十一圓となつて居る。

特殊銀行　廣島縣農工銀行の昭和八年中の年賦償還貸付金は口數二百四十七、金額六十八萬二千五十圓、定期償還貸付金は口數七百五十四、金額百二十五萬九千三百十五圓であつて之が借主職業別は農業口數七十五、此の金額八萬五千五百圓、工業口數二百二十八、金額四十一萬九千七百七十圓、商業口數三百八十六、金額七十八萬千二百八十圓、其他口數三百七、金額六十五萬四千八百十五圓となつて居る。

日本銀行廣島支店の昭和八年中に取扱つた預金總額は四億四千百四十六萬八千八百十四圓、年末現在高七十三萬千百九十圓、貸越總額一萬二千九百七十三圓となつて居る。

銀行金利　昭和八年に於ける廣島組合銀行一箇年平均金利は貸付最高二錢一厘、最低一錢五厘貸越最高二錢二厘二毛、最低一錢六厘二毛割引最高一錢九厘九毛、最低一錢五厘三毛である。

手形交換高　昭和八年中の手形交換高は枚數三十七萬七千八百九十八枚、金額二億二千百三十八萬九千六十一圓となつて居る。

郵便貯金　昭和八年度中に於ける市内の郵便貯金は預入金額千五百四十八萬八千六百圓、拂戻金額千五百四萬五千二百五十一圓、年度末現在千八百七十四萬五千二十九圓、而して昭和八年中新規預入人員は四萬三千六百九十七人となつて居る。

七、教育

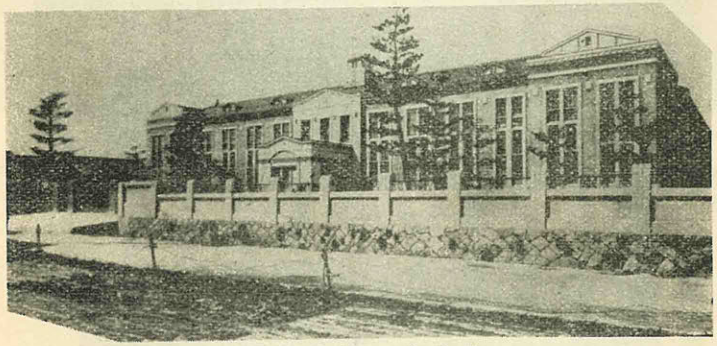
小學校教育　本市に於ける小學校は藩政時代既に其の端を發し明治五年有志相謀り遷喬舍及開成舍等の私立學校を開設し主として初等英語及普通小學科及漢、數學等の教授をしたのに始り後文部省は學制を頒布して學區を定め同六年縣令に依り小學義校なるもの十二校の設置を見るに至つたものが置縣以後に於ける小學校の濫觴である、同十二年教育令の制定發布と共に爾來時勢の推移に伴ひ進運に順適すべく鋭意設備の完成、校舍の增築、教具の改善、校地の擴張、教室の增築等に不斷の努力を拂ひ極力理想の實現に精進して居る。

昭和八年四月現在の狀況を見るに尋常小學校三

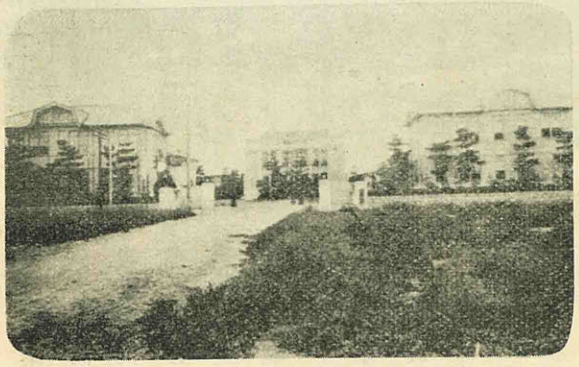
本川小學校

校、尋常高等小學校三十四校、高等小學校二校合計三十九校（內私立小學校四校）である兒童數は市立小學校三萬八千五百四十九人にして此の學級數七百二十五學級、教員數八百十七人を算へて居る。

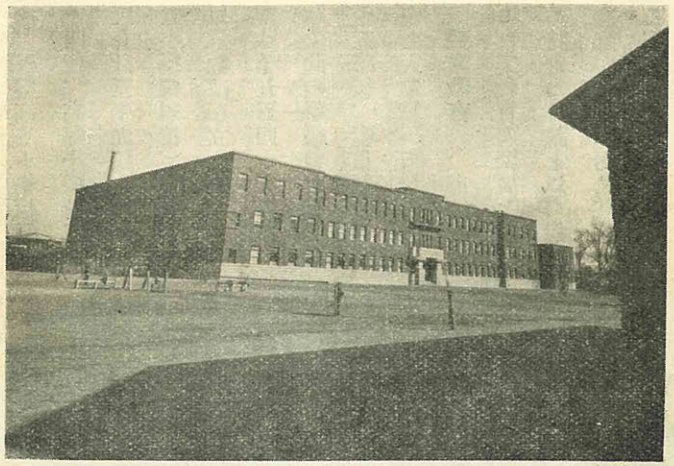
實業教育　市は夙に實業教育の緊要を認め特殊の施設を以て鋭意之が發達に努めて居る、現在市立商業學校



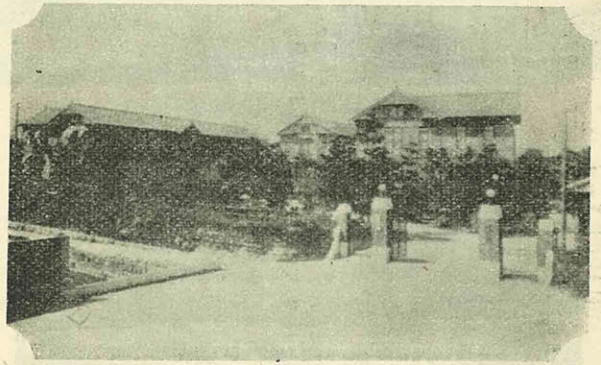
廣島市立商業學校



廣島高等學校



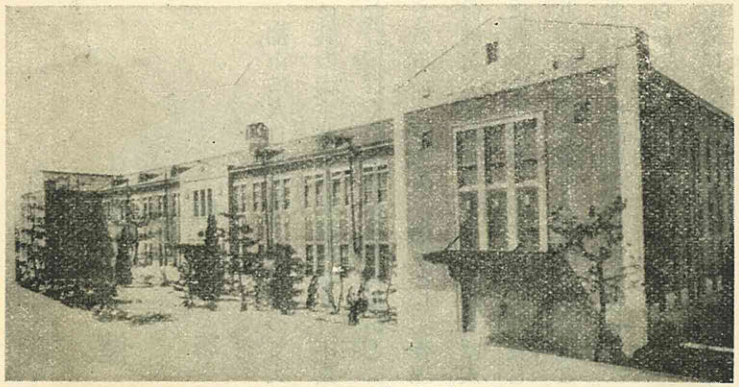
廣島文理科大學



廣島高等工業學校

を首め、夜間に於て商業專修學校、同工業專修學校及補習學校五校があり、晝間勉學の餘暇なき事務員、店員、徒弟等に對し其の實際的技能と修養に資して居る。

官縣公立學校



廣島市高等女學校

廣島文理科大學、廣島高等師範學校、同附屬中學校、廣島高等工業學校、廣島高等學校は官立に係り、廣島女子專門學校、師範學校、廣島第一、第二中學校、商業學校、工業學校、高等女學校、盲啞學校は縣立に係り、市立商業及同高等女學校を加へるときは實に十四校に達して居る。

私立學校　小學校は前述小學校教育に於て敍したが、是に云ふ私立學校は主として中等以上の教育を施すもので廣島女學院專門學校を首め中學校六校、高等女學校六校、實業學校四校があり、其の他に各種教育を施すもの四十校ある。

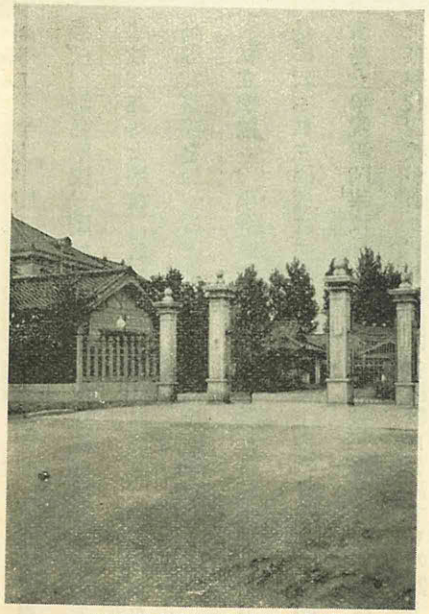
幼稚園　保育を主とする幼稚園は現在私立のもの十七園ある。

八、保健衛生

衛生施設

都市に人口が集中するに從つて次第に其の衛生狀態が亂雜になり、不良になつて行くのは勢止むを得ないところであるが、將來商工都市として合理的發展をなさんとする本市に於ては大いに其の弊を除去し衛生思想の普及を計り衛生施設の改善を行ひ文化都市として名實共に誇ある都市を建設せねばならないのである。

故に本市に於ては鋭意衛生諸般の施設を改善すべく努めて居る、一方市民も全市に衛生組合網を張り、自治的に衛生思想の向上を計り衛生施設の幇助をなしつゝあるのである。



日本赤十字社廣島支部病院

衛生組合　本市の衛生組合は明治三十一年縣令を以て衛生組合規則を定められ爾來面目を一新し衛生組合としての基礎强固となり、市内全般に渉つて治く衛生組合の設置を見るに至り現在二百八十二組合を組織し、之に衛生組長及同副組長、同委員等約二千五百人の役員があり市民の保健衛生の爲に努力して居る。

而して一組合の戸數は約二百七十戸であり之に尙衛生組合聯合會の組織がある。

死亡者比較

年齡別	性別	昭和八年	昭和七年	昭和六年	昭和五年
一才以上滿十才未滿	男	五一	六八	五七	五六
	女	二六	二〇	八四	三六
		一五	四〇	八〇	六六
十才以上滿二十才未滿	男	一一	一一	一一	一一
	女	七六	五六	八五	七三
		〇〇	五〇	〇二	一八
二十才以上滿三十才未滿	男	二二	二二	二二	二一
	女	四三	四二	四三	三九
		一九	六三	二四	五六
三十才以上滿四十才未滿	男	一一	一一	一一	一一
	女	六五	九六	六八	四三
		〇八	一九	七一	五九

計	九十才以上	九八十才未滿	八七十才未滿	七六十才未滿	六五十才未滿	五四十才未滿
女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男
二、二〇五八 二三一	一七 八	一五一 六七	二四三 二三四	三一七 一二	一八六 二七	一五一 一七五
二、一七四 二四一〇	一六 三	一五〇 八二	二七五 二三四	二一九 二一	一七八 二五六	一四〇 一九二
二、一五〇 二六八	一四 五	一四 五四	二四二 二二七	二一四 二八	二一九 二六	一四八 一八九
二、〇一六 二四八	一四 一一	一五 七七	二三四 二五	一八九 三〇五	一九三 二七	一四 一八四五

塵芥汚泥處分　本市一箇年間（昭和八年中）に搬出せられる塵芥總量は四千百七十九萬八千七百八十瓩にして一日平均搬出量は十二萬四千五百十七瓩である、而して之に要する人夫延人員は四萬九千二十人である、搬出せられた塵芥は塵芥假溜場に運搬し船に依り塵芥處分請負人の手に依つて海上數里を距てたる島嶼へ運搬の方法を採つて居る。

市立船入病院・衛生試驗所

屎尿處分　屎尿處分は塵芥處分請負人の附帶義務として汲取處分を負擔せしめ其の數約六千七百戸で其の他は近郊農業者に依つて汲取處分を行つて居る狀態である。

船入病院　本市の傳染病院は市内舟入幸町（天滿川河畔）に在つて大正八年建築費四十萬圓を以て起工し同十三年竣工したものである、其の設備は病室七十九室あり之を普通、特別病室に分ち、特別室のみ有料とし他は無料として居る。

入院患者三箇年間の比較を示せば次の如くである。

市立船入病院入院患者比較

病類別	年次	患者 前年ヨリ越員	患者 本年入院	死亡	全治	年末現在	延人員	患者百ニ付死亡	患者一人平均在院日数
		人	人	人	人	人	人	人	日
虎列刺	昭和八年	—	—	—	—	—	—	—	二、〇
	同七年	—	—	—	—	—	—	—	—
	同六年	—	—	—	—	—	—	—	—
赤痢	昭和八年	—	四四	一二	三〇	二	八八一	二七、二	二〇、〇
	同七年	一	三二	三	三〇	—	七九三	九、四	二四、七
	同六年	—	四二	六	三五	—	九六六	一四、三	二三、〇
腹チフス	昭和八年	二七	三〇八	七六	二四四	一五	一三、四五一	二四、六	四〇、四
	同七年	一五	二八五	六九	二〇四	二七	一一、一八〇	二四、二	三九、三
	同六年	九	五一七	一一三	三八四	一五	二一、七九六	二一、九	四二、〇
痢疾	昭和八年	—	一三	二	一〇	—	二〇二	一六、六	一六、八
	同七年	—	七	一	六	—	一三五	一四、二	一七、八
	同六年	一	七	三	五	一四	一四八	四二、九	二三、〇

病類別	年次	患者 前年ヨリ越員	患者 本年入院	死亡	全治	年末現在	延人員	患者百ニ付死亡	患者一人平均在院日数
		人	人	人	人	人	人	人	日
流行性脳脊髄膜炎	昭和八年	—	—	—	—	—	—	—	—
	同七年	一	三	二	二	—	二一四	六六、二	三四、〇
	同六年	—	二	一	一	一	一〇七	五〇、〇	一九、〇
猩紅熱	昭和八年	二	三四	一	三五	—	一、二七七	二九、四	三七、五
	同七年	五	一九	二	二〇	二	六九九	一〇、五	三六、七
	同六年	三	一八	二	一四	五	五四八	一一、一	二〇、〇
パラチフス	昭和八年	—	一二	二	九	—	三一七	一八、一	二八、八
	同七年	一	一六	一	一六	—	六〇六	六、二	三七、八
	同六年	—	一〇	二	七	一	四六三	二〇、〇	三五、〇
ヂフテリヤ	昭和八年	一	一〇	三	八	—	二七六	二七、二	二七、六
	同七年	—	一〇	—	九	一	二八五	—	二八、五
	同六年	—	一〇	—	一〇	—	一六一	—	二〇、〇

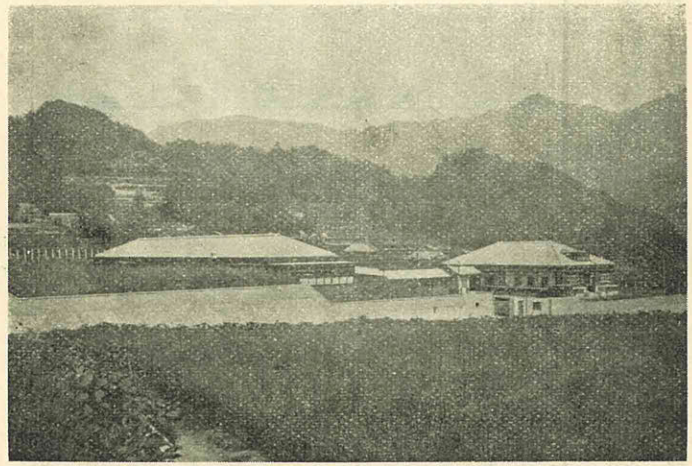
畑賀病院　本市の結核療養所（畑賀病院）は市外畑賀村に在る。本病院は結核豫防法に依據し、結核病に罹り貧困其の他の事由に依り療養に途の無い者を收容治療せしめる病院で大正八年設置命令

を受けて十數年幾多の曲折を經て遂に建設せられたものである。

現在病室は十六病室あつて其の中輕症患室三、中症患室五、重症患室八となつて居り、其の患者收容力は輕症二十四名、中症二十名、重症八名合計六十名となつて居る、其の他治療にはレントゲン室（レントゲン一臺）日光浴場（二箇所約三十坪）消毒場（SK式消毒機）等近代醫學の粹を集め間然する所無きを期して居る。

由來畑賀村は風光明媚にして閑靜、山陽本線安藝中野驛より僅に四町餘、本市より自動車にて約四十分にして達する距離に在つて眞に理想的療養地である。

衞生試驗所　本市の衞生試驗所は大正十五年市



市立畑賀病院

畑賀病院病室の一部

立船入病院の一部を充當して開設し、本市上水道の水質試驗、各種衞生上の試驗及調査並一般の依頼試驗をなして居る。

昭和八年中同所取扱に係る件數は四千四百七十八件にして其の內有料試驗三千三百九十三件（料金二千二百九十圓）無料試驗千八十五件となつて居る。

公私立病院　本市に於ける公私立病院數は十八病院にして其の內全科二、內科三、外科六、外科皮黴科二、產婦人科二、腦神經科一、肺結核口頭結核科一、內外科一にして病床數五百四十一床、昭和九年三月末現在の入院患者數は百二十五人（昭和八年度中延人員六萬五千七百五人）となつて居る。

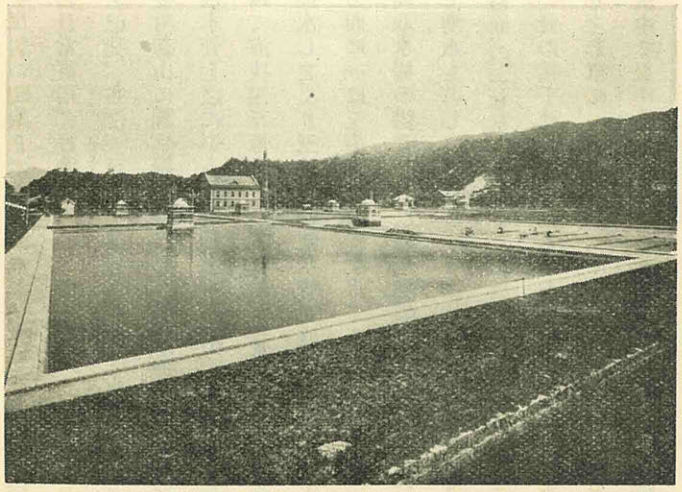
醫師及藥劑師　昭和八年末現在本市內に於ける醫師は三百七十二人（內開業せる者二百十四人）齒

科醫百七十人（開業せる者百三十九人）藥劑師百八十三人（開業せる者百十五人）となつて居り、之を本市昭和八年末現住戸口に對し割合するに醫師一人當り平均人口七百九十人、平均戸數百九十七戸となつて居る。

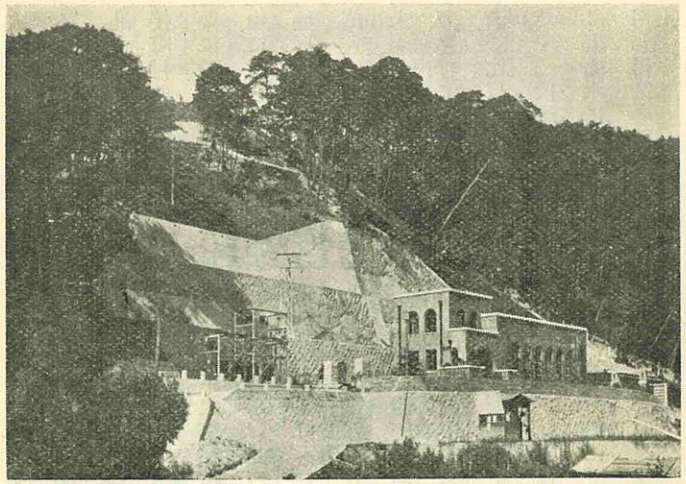
上水道

上水道は明治二十九年軍用水道と相俟つて起工し同三十一年一月竣工す、其の工費は軍用六十三萬九千八百四十五圓、市有二十九萬四千六十五圓を要した、而して軍用水道は同三十一年九月一日より向ふ三十箇年間本市使用の許可を得同三十二年一月より陸軍諸官衙及市内一般に給水を開始したのである、當時の施設は人口十二萬人に對するもの（一人一日最大給水量一〇六立一九）であつたが戸口逐年增加して僅々十箇年に給水限度の人口を超えるに至つたので同四十年三月第一期擴張工事を起し同四十一年三月竣工を見る、此の工費十四萬五千五百九十四圓を要し人口十六萬人に對する最大給水量一萬六千八百八十五立方米を供給し得るに至つたのである、然るに本市の發展著しく人口益々增加し既設の設備では漸く給水不足を告げ大正十年五月第二期擴張工事を起し同十三年六月竣工す、此の工費百八十九萬九千七百三十圓、人口二十五萬人に對する最大給水量三萬六千四百三十九立方米（一

人一日最大給水量一四八立六六）の需要を充し得るに至つたのである、爾來本市は異數の發展を爲し逐年人口增加するばかりでなく昭和四年四月隣接町村の合併等に依り急速に第三期擴張工事の必要に迫られ昭和五年八月起工、目下工事繼續施行中に屬し昭和九年度竣工の豫定である、此の工費豫算總額百九十九萬六千百七十三圓で人口四十萬人に對する最大給水量七萬六千四百五十五立方米（一人一日最大給水量一九一立一四）の給水能力を有する施設である、此の工事設計中在來の設備に比し特に異なる點は從來の如く表面水を取水せず、伏流水を取入れることである、此の伏流水は表面水に比し水質著しく向上し其の儘にても飲用し得又冬季は其の水温六、七度上昇し夏季はこ



牛田淨水場



己斐調整場

れと反對の現象を示し表面水の缺點を或る程度迄緩和し日常實用に好適するのである。

又己斐、古江、草津、三篠各町の配水に對しては己斐町新山に調整場を設け己斐橋に至れる三五〇粍配水本管を之に引入れ電動送水喞筒(三十馬力三臺)を以て海拔四五米山上の調整地(容量八七六立方米)に揚水し之より三五〇粍配水管二條に依り一は草津町方面に一は三篠町方面に配水する設備である。

尙取水場の鐵管布設は在來地盤以下八、九米の位置で湧水も甚しく普通接手では施工が困難なので最近發明の「ビクトリック」接手を使用したのである、此の接手は特種「ゴム」と可鍛鐵製の覆函より成り之を單に「ボールト」にて締付けるのであるから水中でも作業が容易な計りでなく水壓保持が確實

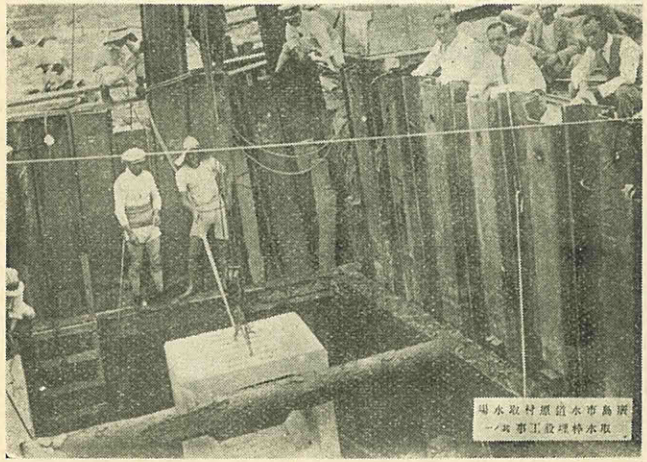
で地震の場合等にも普通接手に比べて遙に安全なのである。

此の擴張工事竣工後の水源地設備の大要を示せば左の通である。

取水場　位　置　廣島縣安佐郡原村大字東原字和久操

面　積　六、七〇〇平方米

取水枠　最低水面下五米を基礎とし方形鐵筋混凝土造函內法〇、九一米一、二一米一、五二米の三種を長方形に併列、周圍に清淨なる川砂利を塡充し枠に穿ちたる多數の小孔より浸



原村取水場工事ノ一部

透水を集む。

取水管　九〇〇粍鑄鐵管二條　延長二一〇米

取水喞筒室　一棟　一五〇馬力電動取水喞筒四臺

送水管　九〇〇粍鑄鐵管一條　延長二、四五〇米

浄水場　位置　廣島市牛田町字神田川成

面積　一〇一、四一二平方米

濾過池　八個　總濾過面積　一三、八四〇平方米

鹽素滅菌室　一棟

送水喞筒室　二棟　一六五馬力電動送水喞筒四臺
二〇〇馬力內燃機動送水喞筒三臺

配水池　七個　貯水量、一四、六八〇立方米

量水室　二棟　六五〇粍、六〇〇粍、五〇〇粍
四五〇粍ベンヂユリメーター各一臺

取水場　取水枠にて取水せる伏流水は取水喞筒に依り浄水場に送水し濾過池に依り浄化したる後送水喞筒を以て海拔五二米の山上にある配水池に壓送し市內に配水するのである。

尙浄水場には在來地表水取水に對する設備を其の儘豫備として存置し新設取水場事故の時使用し給

水上支障を起さぬ樣にする計畫である。

下水道

本市の下水道は明治三十一年上水道と併行して之が建設を企圖せられたが財政其の他の理由に由り延期せられ同四十一年三月五箇年繼續事業として起工せられ後國庫補助等の關係に由り七箇年繼續に變更を見るに至り大正五年五月總工費百四十六萬三千餘圓を以て竣工したのであるが、其の延長は十四萬千五十一米、排水面積五百九十二萬七千平方米其の工事の大要は次の如きものである。

構造　は凡て土管及鐵筋混凝土管を以てせられ平均六十米に一箇の人孔及燈孔を設置して居る。

下水管の內徑は最大幅員二米、水深一米七の暗渠及〇、八米乃至〇、〇二米の土管、混凝土管を流量の多寡に依て數種の口徑のものを使用して居る。

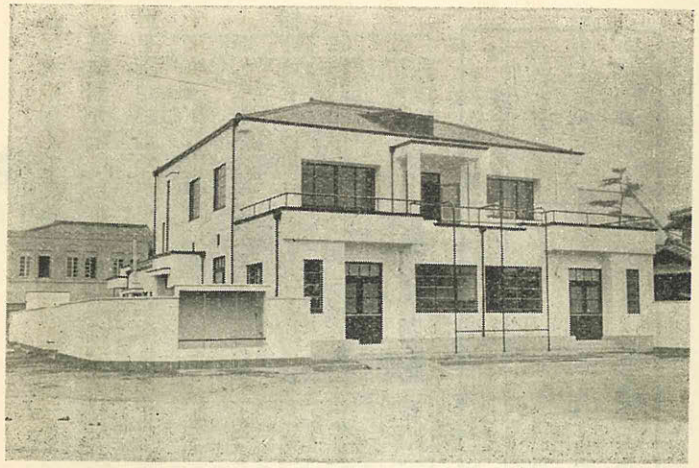
側溝　道路上及沿道家屋の兩水を直に下水道に導く爲其の兩側軒下に幅員〇、二四米深さ〇、〇九米の側溝及內徑〇、一五米の雨水引入管を築造し約三十六米毎に一箇の雨水桝を設置して本管と連絡せしめて居る。

各戸下水、汚水（一日一人平均使用水量一一〇立と推定）雨水（一時間二十五粍の降雨を標準）は暗渠式に依り公道以外は各戸の經費を以て戸毎或は數戸共同で下水管に連絡せしめて居る、公設枝管（內徑〇、一二米）の延長は四萬五千四百八十米である。

抽水場　本市の北部は高燥であるが南部新開地方面は低濕にして下水の自然流下に依る排水が不可能であるので此の方面に六箇所の抽水所を設けて汚水、雨水の疎通迅速を圖ることゝした。

而して下水道完成後の掃除方法には多大の注意を拂ひ年々修理改善及下水道の擴張を圖つて居るが現在に於ては幹支線の延長二十六萬四千九百十米、其の排水面積七百九萬千三百三十餘平方米に及び抽水所十一箇所を數へて居る。

昭和四年四月隣接七箇町村の合併及逐年本市の發展に伴ひ人口三十萬餘に達したる現在に於て下水道の擴張は急務中の急務に屬せる問題なので兩三年來より關係者に於て調査研究中であるから早晩具體的なものになることゝ信じて居る。



中央職業紹介所

九、社會事業

近時の世態は都市をして社會問題を尤も重要なる行政の一部門として居るが、是等の經緯及沿革は茲に喋々を費す必要もない程、左樣に明々白々である。

本市が時世の要求に應じて、積極的に社會政策の實施に着手したのは十三年前のことで大正十一年五月當時庶務課に社會係として事業に從事して居たものを始めて社會課として獨立新設せられたものである、爾來諸般の施設相踵いで起り今日に至つて居るが、刻々に變化する社會相は益々本事業の充實と諸施設の實現を促しつゝあるのである。

而して本市直營及一般社會事業施設の現況を述ぶ

れば次の如くである。

職業紹介所　本市の職業紹介所は從來東西に各一箇所づゝ在つて各其の全機能を擧げて能率の增進を圖つて居たが更に昭和八年市内中央部に紹介所の建築を計畫し本年十月工費三萬二千餘圓を以て千田町三丁目電車通に面して白堊二階建のものを建築したのである。

而して本紹介所に於ては紹介部門を男子部、婦人部、少年部及知識階級部の四部門に分ち別に勞働紹介所を設けそれ〴〵專任の職員をして之に當らしめて居るのである。

昭和八年中の取扱に係る紹介數は次の通である。

紹介所紹介成績

性別＼種別	求人數	求職者數	就職者數
男	七、四一二人	七、三一三人	二、一四五人
女	八、九四二	四、九三九	二、九九六
計	一六、三五四	一二、二五二	五、一四一

以上の如く求職者に對する就職者の歩合は四十二パーセントを示して居る。

近年同所を利用する者激增し來り殊に求人數の增加は財界の好轉と同所を經由し來る就職者の素質の向上良好を雄辯に物語つて居るものと謂ふことが出來る。

最近の紹介成績を示せば次の如くである。

紹介所紹介成績累年比較

年次＼種別	求人數			求職者數			紹介狀交付數			就職者數		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
昭和四年	四、八〇八人	三、四一五人	八、二二三人	五、七〇五人	二、二三九人	七、九四四人	五、七〇五人	二、二三九人	七、九四四人	一、三九〇人	一、〇七四人	二、四六四人
同五年	五、二三九	四、〇七九	九、三〇八	七、五〇八	二、九〇一	一〇、四〇九	七、五〇八	二、九〇一	一〇、四〇九	一、七〇四	一、四一二	三、一一六
同六年	五、八〇一	五、五八二	一一、一八三	八、一二八	四、〇七八	一二、二〇六	八、一二八	四、〇七八	一二、二〇六	一、八六二	二、五三四	四、三九六
同七年	六、四四〇	八、七五六	一四、九九六	一四、七〇七	七、一一三	二二、二二〇	一四、七〇七	七、一一三	二二、二二〇	二、〇一七	二、九六七	四、九八四
同八年	七、四一二	八、九四二	一六、三五四	七、三一三	四、九三九	一二、二五二	七、三一三	四、九三九	一二、二五二	二、一四五	二、九九六	五、一四一

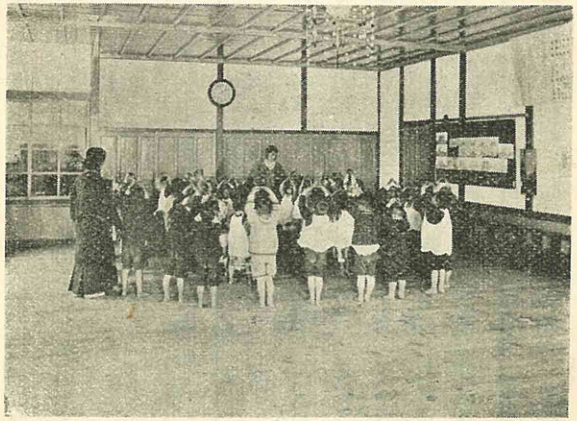
託兒所　少額所得者の幼兒（三歲以上學齡期迄）を受託して之を保育し、併せて依託者の就勞能力を助成するの目的を以て大正十二年東西兩隣保館に託兒部を開始し、後昭和四年隣接町村合併に依

り草津町の經營せし草津託兒所を本市に移管し其の後更に本事業の必要を感じ昭和五年仁保、廣瀬、江波三託兒所及昭和八年三篠、楠那二託兒所を開設し現在に至つて居る。

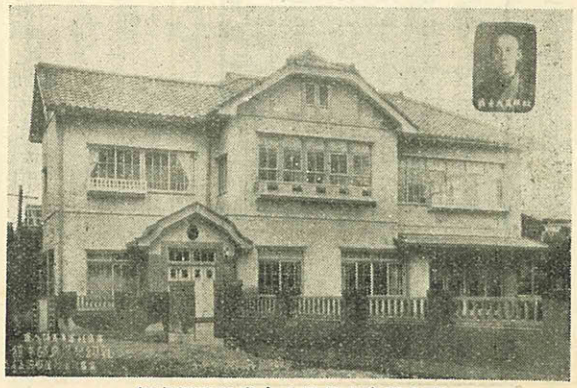
尚此の外私設のものに財團法人喜清會宇品學園託兒部及荒神愛兒園等がある。

而して之に保姆二十七人が從事して居る。

昭和八年中の幼兒受託數は次の通である。



三篠託兒所



廣島社會事業婦人會乳幼兒保育部

託兒所託兒成績

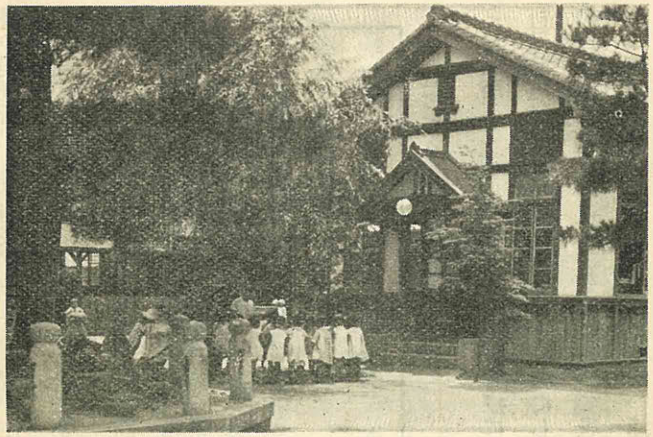
	男女別	職員	幼兒數 前年度越人員	本年度入所人員	本年度退所人員	年度末現在員	一箇年度受託延人員
草津託兒所	男	三	三〇	四三	四三	二九	一八、六五三
	女		二七	二七	三五	一九	一四、七九〇
廣瀬託兒所	男	二	一〇	二〇	二七	二一	九、二七八
	女		一七	二〇	三三	二四	九、六五〇
仁保託兒所	男	三	一九	二二	二八	四八	一二、五一〇
	女		二八	二四	二四	五八	一四、六四一
江波託兒所	男	二	一四	二九	二五	二九	八、六一九
	女		一五	二三	二一	二七	九、五〇五
三篠託兒所	男	二		二七	二二	二九	六、八二〇
	女			二〇	二三	二六	七、〇一三
楠那託兒所	男	三		二一	二五	一六	四、五七〇
	女			四四	一七	二七	六、四九七

東隣保館託兒部	男	兼務	二	二	三四	一三	一六	五〇	一一、三一四
	女			三三		一二	一五	四八	一〇、九六六
西隣保館託兒部	男	兼務	二	四	五一	六二	三九	七四	一九、四三五
	女			七二		八三	五四	一〇一	二八、〇七二
宇品學園託兒部	男	兼務	二	五	二四	五九	四三	四〇	一四、六二〇
	女			一九		六八	四二	四五	一四、五二〇
荒神愛兒園	男		一	九	六	一五	八	二	一、一三〇
	女				四			三	六、二三〇

乳幼兒保育所　本所は廣島社會事業婦人會の經營に係り昭和四年十一月開設したものである。昭和八年度中の事業成績は次の如くである。

乳幼兒保育事業成績

性別	種別	前年度越人員	本年度入所人員	計	本年度退所人員	本年度中預り延人員	晝間預り	夜間預り
男		七人	二四人	三一人	一四人	三、四八四人	一七〇人	九五人
女		九	一五	二四	一五	三、八一九	一六三	一三三
計		一六	三九	五五	二九	七、三〇三	三三三	二一七



西隣保館

救貧事業　糊口に窮する細民に對し生活救助、醫療救護、助產救護、生業扶助、埋葬費補助を行つて居る、其の昭和八年中の取扱に係る被救助者は六百九十二人（延人員十四萬三千五百九十人）、金額二萬六百四十三圓（縣費九百四圓、市費一萬九千七百三十九圓）に達して居る。

而して是等救護事業に當る方面委員は百七十九名である。

隣保館　社會教化と融和事業施設として大正十三年二月市立として東（尾長町）、西（福島町）二箇所に隣保館を開設したのに始つたものである、而して昭和四年七月宇品町へ財團法人喜清會が宇品學園を創設し同方面の隣保事業に盡し現在に至つて居る。

而して其の內容施設の主なるものは託兒部、簡易圖

書の閲覧所、人事相談、講演及講習、住居宅の改良等である。

昭和八年度中の事業成績は次の通である。

隣保事業（隣保館利用者數）成績

名稱／種別	託兒部	簡易圖書閲覧所	人事相談	講演講習	兒童關係	保健衞生	慰安娯樂	諸集會	無料診療	其他	合計
東隣保館	二一、〇四〇人	一、一〇六人	六二三人	七、七一五人	二、〇五九人	三一、〇八五人	一、九五二人	一、一〇二人	— 人	九七九人	六七、八六〇人
西隣保館	四七、五〇二	一、一二四	三六七	一六八	一一、五三九	一一、八三三	一、六九七	一、一四〇	—	四、六五七	八〇、〇二七
宇品學園	二九、一四〇	一二、八七三	三七三	一五〇	—	—	—	七、八八五	八五四	一、一一九	二、三九四
計	九七、六八二	一五、一〇三	一、三六四	八、〇二三	一三、五九八	四二、九一八	三、六四九	一〇、二二七	八五四	六、七五五	二〇〇、二八一

備考　人員數ハ總テ延人員ヲ掲グ

診療所　本市の診療所は實費診療にして昭和四年九月東西に各一箇所設置せられたのに始り診療科目は内科、小兒科及簡易なる外科にして調劑はせずして處方箋のみ交付して居る、而して醫療費を納付し得ない貧困者は之を無料として居る。

一箇年間の診療延人員を示せば次の通である。

診療人員（昭和八年度）

性別／科目	内科	外科	小兒科	眼科	耳鼻咽喉科	婦人科	泌尿科	皮膚科	花柳病科	身體檢査	計
男	四、五四一	二、五二三	一、八九五	四〇九	一、四七八	—	四一七	七四九	八六五	一四四	一三、〇二〇
女	五、四九二	一、六四二	一、六二八	一、〇三一	一、八四一	七七	一五八	四〇六	一五八	一九三	一三、六二六
計	一〇、〇三三	四、一六四	三、五二三	一、四四〇	三、三一九	七七	五七五	一、一五八	一、〇二三	三三七	二五、六四六

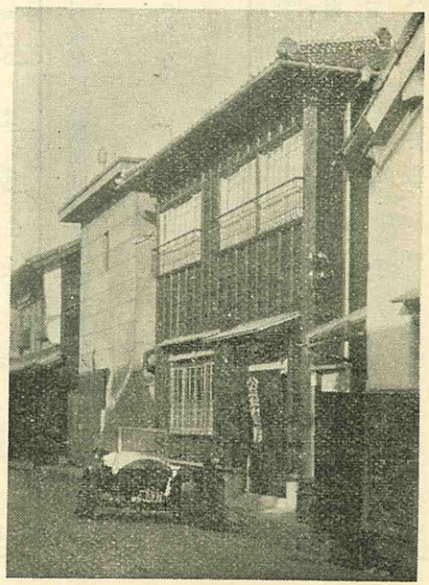
公益質屋　本市の公益質屋は昭和五年十二月東部に一箇所開設せられ引續き翌年一月西部に一箇所開設せられ現在に至つて居る。

而して之が一箇年度間の成績は次の如きものである。

公益質屋事業成績（昭和八年度）

名稱	前年度ヨリ越金		入質		出質		流質		年度末現在	
	口數	金額	口數	金額	口數	金額	口數	金額	口數	金額
東公益質屋	二、四七六	一〇、五三四円	八、八三三	三五、七七四円	七、九三〇	三二、五八三円	二四〇	五八三円	三、一三九	一三、一四二
西公益質屋	二、八二九	一一、〇三〇	六、六二五	二六、五一五	六、四二八	二六、三三五	二四〇	六六五	二、七八六	一〇、五五五
計	五、三〇五	二一、五六四	一五、四五八	六二、二八九	一四、三五八	五八、九〇八	四八〇	一、二四八	五、九二五	二三、六九七

宇品學園



東公益質屋

兒童保護　本事業は孤兒、貧兒を教保育するを目的とするもので本市に於ては市營のものなく團體經營のものに廣島修道院、同育兒院がある。

昭和九年三月末現在收容人員は男兒八十一名、女兒

廣島修道院

三十七名であつて其の最年長は二十一歳、最年少は一歳である。

養老所　本市に於ける養老所は個人經營のものに廣島養老院がある。

昭和九年三月末現在に於ける在院人員は男十九名、女二十二名計四十一名である。

而して最も多いのは七十歳以上より八十歳未滿の十一名であつて、在院者の總てが扶養義務者を持たない者ばかりである、在院年數の永い者は在院五年以上四名、三年以上五年未滿九人、三年未滿二十八名となつて居る。

免囚保護　財團法人佛教慈善會の經營するものに廣島保護院がある。

昭和八年度の事業成績は次の如きものである。

區分	前年度ヨリ越人員 直接	前年度ヨリ越人員 間接	本年度新保護人員 直接	本年度新保護人員 間接	本年度解除人員 直接	本年度解除人員 間接	現在員 直接	現在員 間接	一箇年延人員 直接	一箇年延人員 間接
男	六	九三	九二	二三九	九三	一八七	三	一四七	一、五九三	二五、六九五
女	—	二	—	四	—	三	—	三	—	五一九
計	六	九五	九二	二四三	九三	一九〇	三	一五〇	一、五九三	二六、二一四

異常兒教育　異常兒教育事業中吃音矯正を主旨とするものに樂石社廣島支部があり現在收容人員八名で經營は個人經營となつて居る。

無料宿泊所　本市の無料宿泊所は個人經營にして市營のものは無い。昭和八年度の宿泊人員は次の如きものである。

無料宿泊所宿泊人員

區分	本年度宿泊人員	宿泊延人員	一月平均數
男	三、一〇八	一五、六二五	四二、八〇
女	二二	六八	〇、一九
子供	五六	一三九	〇、三八
計	三、一八六	一五、八三二	四三、三〇

廣島養老院正面

廣島無料宿泊所

十、司法、警備

司法、行刑

裁判所職員　昭和八年末現在廣島區裁判所及同地方裁判所職員數は判事二十人、檢事十一人、司法官試補五人、監督書記四人、書記三十八人、執達吏七人合計八十五人である。

事件　昭和八年廣島區裁判所取扱の刑事々件は千八百四十件、民事々件一萬一千九百二十九件、同地方裁判所取扱事件は刑事々件四百四十四件、民事々件二千百五十二件となつて居る。

控訴院職員　昭和八年末現在廣島控訴院職員數は、判事十人、檢事五人、書記長及監督書記二人、書記十四人合計三十一人である。

事件　同上昭和八年取扱に係る刑事々件は二百九十八件、民事々件七百五十一件となつて居る。

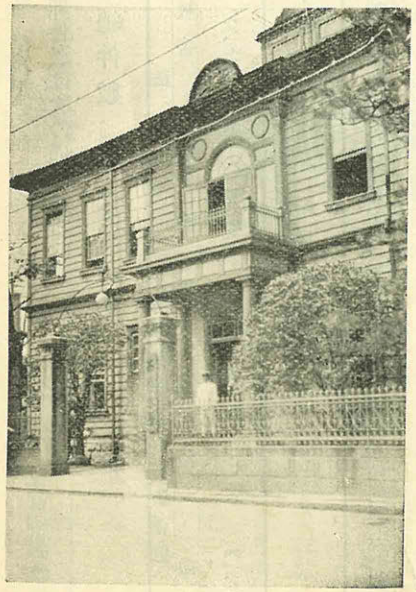
刑務所　昭和八年末現在に於ける廣島刑務所職員は刑務所長一人、典獄補一人、看守長八人、作業技師及同技手十一人、保健技師一人、教誨師三人、看守百四十人、其の他三人、雇傭人二十七人合

計百九十五人となつて居る。

昭和八年末現在に於ける刑務所收容人員は千六百十八人にして內男千六百五人、女十三人であつて其の內受刑者千四百七十二人、刑事被告人百三十五人、勞役場留置者十一人となつて居る。

警備

警察　市內に東、西、宇品の三警察署と廣島水上警察署があり其の管下に屬する巡査派出所三十五箇所、同駐在所七箇所あり、而して市外海田市警察署及廿日市警察署管內に屬する仁保町（向洋堀越）と草津、古田町に巡査駐在所四箇所あつて署員合計三百八名である其の內警視二名、警部三名、警部補十三名、巡査部長三十六名、巡査二百五十四名とな



西警察署

つて居る。

市内所在四警察署一箇年間取扱に係る犯罪件數は次の通である。

犯罪被害及檢擧總件數（昭和八年）

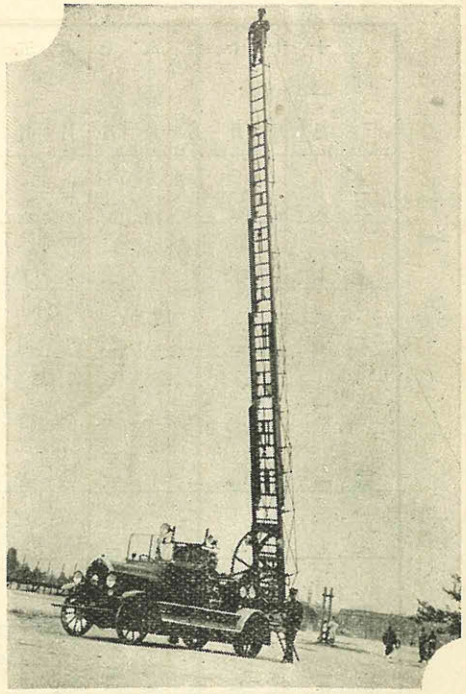
總數	犯罪被害	檢擧	刑法犯	犯罪被害	檢擧	罰金刑以上ノ諸法令犯	犯罪被害	檢擧
	七五、七六二	七五、七三五		六八、七二九	六八、六九二		四、六九八	四、六九八

犯罪送致人員及其ノ處分ノ結果（昭和八年）

送致人員	處分ノ結果								
	有罪	無罪	不起訴	起訴猶豫	起訴中止	微罪移送	死亡	計	未決
二、一八四	二、五四〇	六七三	四〇四	五、五八四	一八一	四三〇	三八	—	九、八五〇	一、三三四

消防　市内の消防機關は現在舊市内を四部に分區し其の他の新區域に九消防組を設置し別に東西兩警察署に常備消防班を設け市内消防警備の完全を期して居る。

而して之が組員總數は千百三十一人にして内組頭十人、小頭部長二十二人、小頭五十三人、其の他千四十六人である、此の内には常備消防手四十人、同運轉手十人を含んで居る。



梯子自動車

消防器具は消防艇一隻、自動車喞筒七臺、(内梯子自動車一臺を含む)ガソリン喞筒、腕用喞筒各五臺、水管自動車三臺其の他附屬品百六十五箇及ホース延長一萬二千七百九十三米である。

本市一箇年間の火災總數は出火度數百二十三回、損害總額推計十四萬二千二十八圓である、之が詳細は次の通である。

火災月別（昭和八年）

種別＼月次	出火度數				出火度數ノ内				焼失棟數			焼失面積	損害概額
	失火	放火	不審火	計	延焼	不延焼	即時消止	計	全焼	半焼	計		

月	件	件	件	件	件	件	件	件	棟	棟	棟	坪方米	円
一月	二	一		三	一		二	三	七	二	九	一四六、三	四、三八六
二月	一八	一	一	一〇	四		一六	一〇	九	四	一三	一七〇、九	四六、四三五
三月	一〇		二	二	二	一		二	二	二	四	五三六、三	三二、一一八
四月	二	一		二	二	二	二	二	三	二	四	一〇五、〇	三、一六一
五月	六		二	八	二		六	八	一	一	一	一〇四、五	三、四二九
六月	八			八	二		六	八	五	七	七	一七三、九	九、九二六
七月	一〇	一	一	二	二	二	七	二	二	二	四	一四〇、九	一四、〇三五
八月	四		一	五	一	五	五	五	五	五			一四
九月	五		一	六	一	一	四	六	一	六	三	一二五、七	一二、〇七
十月	五		二	七	一	一	五	七	二	二	四	一二〇、九	七、五〇九
十一月	五		一	六	二	二	四	六	二	一	三	一八一、八	八、一〇〇
十二月	八		七	一五	四		一	一五	三	三	七三、七	一、八二八、九	九〇八
計	一〇一	四	一八	一三	二三	八	九三	一三	三七	一八	五五	三二、八一八、一	一四二、〇三八

十一、兵　事

壯丁及檢査成績　昭和八年本市壯丁は總數千九百二十六人にして其の內合格者千八百六人其の內譯次の通りである。

壯丁檢査成績（昭和八年）

壯丁人員														
總數	合格												不合格（丁種）	
一、九二六人	甲種	第一乙種	第二乙種	丙種										
一、八〇六人	四九一人	一九七人	三六四人	九五四人									一八人	
再檢査（戊種）	壯丁人員百ニ付合格者												壯丁人員百ニ付不合格者	
	甲種	第一乙種	第二乙種	丙種										
二人	二五・九九人	一〇・二三人	一八・九〇人	三九・一五人									六・一三人	

壯丁學歷　昭和八年本市壯丁の學歷は次の通である。

壯丁學歷表（昭和八年）

區分＼學歷	大學	專門學校	中學	高小	尋小	尋小中退	不就學中可讀書	無學	計
甲種	一三	一四	九七	二四五	一一三	八	一	—	四九一
第一乙種	九	二六	五三	九七	二九	四	—	—	一九七
第二乙種	九	二四	一〇四	一六四	五六	七	—	—	三六四
丙種	二八	四七	二〇一	三三二	一五〇	一四	—	—	七五四
丁種	三	三	二一	四一	三三	一一	二	四	一八
戊種	—	一	—	—	一	—	—	—	二
計	五四	一一五	四七五	八四九	三八二	四四	三	四	一、九二六

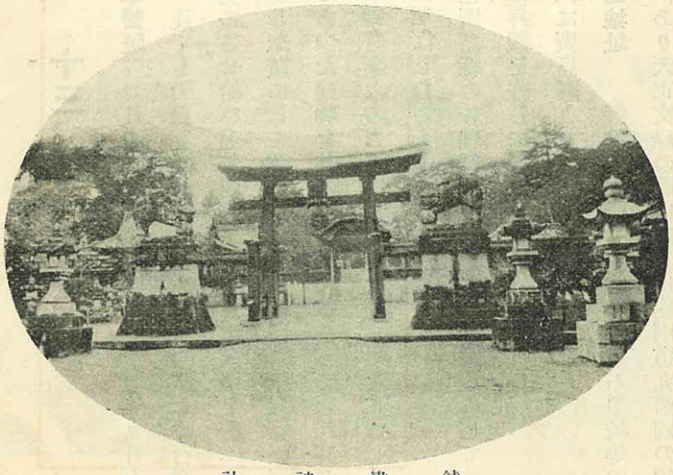
十二、神社及宗教

神社　昭和八年末現在に於ける市内所在の神社數は六十二社にして其の内譯は縣社一、鄉社二村社十八、官祭招魂社一、無格社四十であつて之に奉仕する神職は二十九人にして別に兼務者八人がある。

神道教會所　昭和八年末に於ける神道教會所及説教所は六十四會所あつて其の内最も多いのは天理教の二十九、次いで金光教の十三、神理教の七、扶桑教の六、其の他九の順序となつて居る。

寺院及住職　昭和八年末現在に於ける市内所在の寺院數は百四十九箇寺あつて其の内譯は眞宗の七十九箇寺、淨土宗の二十一箇寺、眞言宗の十六箇寺、日蓮宗の十三箇寺、曹洞宗の十四箇寺、臨濟宗の六箇寺であつて之に職住する住職數は百四十九人である。

佛教説教所　昭和八年末現在に於ける説教所數は六十五所にして其の内眞宗最も多數を占めて居る。



饒津神社

大本營阯

十三、史蹟名勝

大本營阯　日清戰役の際、明治二十七年九月十五日、畏くも大纛を此の地に進めさせ給ひし時行在所に充てさせ給ひ翌年四月二十七日迄萬機を統べさせ給ひし聖蹟にして舊廣島城本丸址即ち第五師團司令部であつた建物を其の儘に御利用あらせられ其の調度の御質素なることは拜觀者をして襟を正さしめ感激に咽ばしむるものがある。

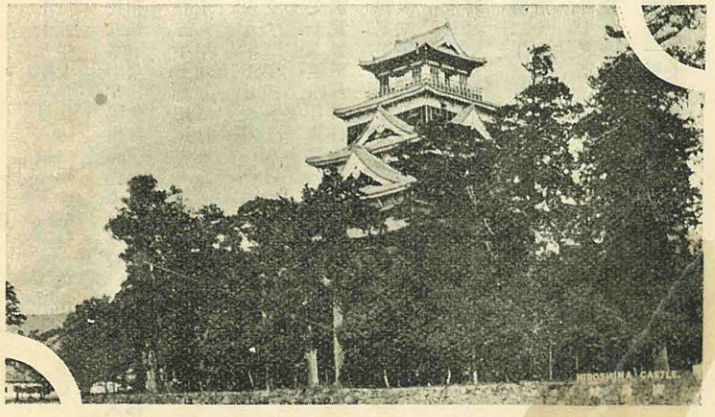
現在廣島縣の管理に屬し監視警護を嚴重にして一般人に拜觀を許して居る。

里程は廣島驛より二十三町ある。

廣島城址　鯉城、在間城、當磨城、石黑城等の別稱があり天正文祿の際山陽、山陰兩道九箇國の領主毛利右馬頭輝元の築く所である、天正十七年四月輝元より二宮太郎右衞門尉就辰に築城總奉行を命じて董役せしめ同月十五日「鋤初の式」を行ひ天正十九年四月牙城先づ成り輝元高田郡吉田より宗族重臣を隨へて城に入り慶長四年正月十四日竣工の賀儀を行つたのである。

現在に於て舊態を存するものは天主閣と城廓の一部のみとなつて居る、天主閣は五層にして東西二十二米、南北十六米、高さ三十三米巍然として冲天に聳えて居る。

尙歷代の城主を擧げれば次の如くである。



廣島城址

毛利輝元（九箇年在城）天正十九年四月入城慶長五年十月長防二州に削封、長州萩に移る

福島正則（十八箇年）慶長五年十月尾州清洲より移封、同六年三月入城元和五年六月褫封、同年七月信洲高井野邑に移る

浅野長晟（十三箇年）元和五年七月紀州より移封、同年八月入城寛永九年九月三日逝去

同光晟（三十九箇年）寛永九年十月襲封寛文十二年四月十八日致仕

同綱晟（十箇月）寛文十二年四月襲封延寶元年正月二日逝去

同綱長（三十五箇年）延寶元年二月襲封寶永五年二月十一日逝去

同吉長（四十二箇年）寶永五年三月襲封寶暦二年正月十三日逝去

同宗恒（十一箇年）寶暦二年三月襲封寶暦十三年二月二十一日致仕

同重晟（三十六箇年）寶暦十三年二月襲封寛政十一年八月二十一日致仕

同齊賢（三十一年四箇月）寛政十一年八月襲封天保元年十一月二十一日逝去

同齊粛（二十七年四箇月）天保二年正月襲封安政五年四月十二日致仕

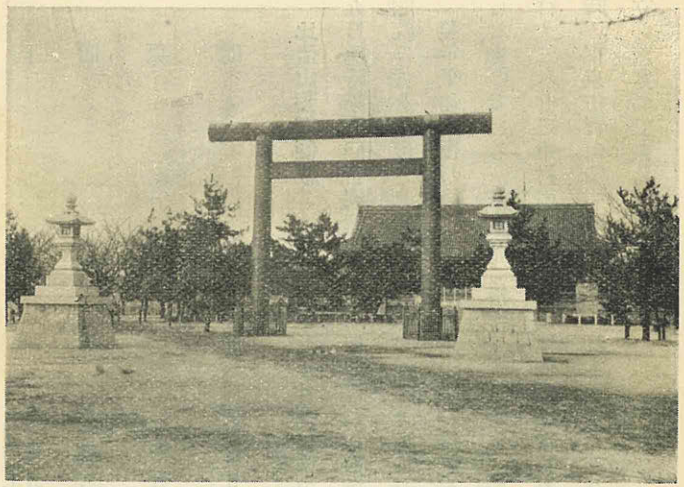
同慶熾（六箇月）安政五年四月襲封同年九月十日逝去

同長訓（十年三箇月）安政五年十一月襲封明治二年正月二十四日致仕

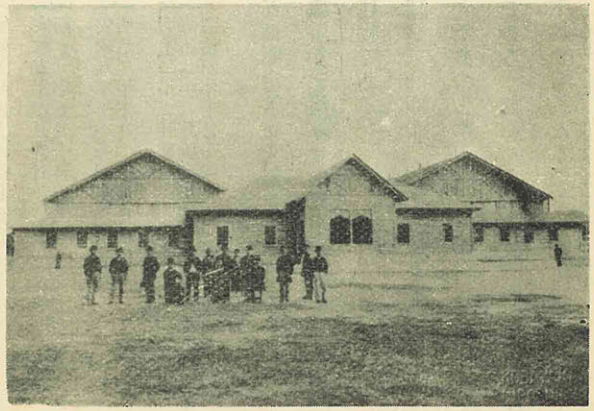
同長勳（二年七箇月）明治二年正月襲封明治二年六月版籍奉還、廣島藩知事に任ぜられ、明治四年七月十四日廢藩置縣に至る

比治山舊御便殿　明治二十七年日清戰役の際九月十五日明治大帝大纛を本市に進め玉ひ、十月十五日臨時第七回帝國議會を廣島に召集し、西練兵場に假議事堂を建設せられ十月十八日車駕親臨して開院の式を擧げさせ給ひし時御便殿に充てさせられし御建物である。

翌年平和克復の後、本市は永久記念の爲之が拂下げを請ひ、同四十二年十月地を此處に卜して奉遷したものである、御建物は格行二十米四五　梁行九米〇九であつて本市は之に桁行三十二米七二、梁行十二米七二用材栂白木の上覆建物を造營し奉安したのである、殿前の大華表は、明治大帝御大葬の時、東京市青山齋場殿に建てられ大正二年二月東京市に下賜せられたものを本市に讓受けて此處に建立したものである。



舊御便殿



明治二十七八年戰役の際廣島市西練兵場に建設せられたる臨時帝國議會假議事堂

御即位大典記念館

御即位大典記念館　大正四年大正天皇御即位大典の禮を擧げさせ玉ふや、本市は國家最高の典儀を永遠に記念する爲、大正七年比治山公園に繪馬堂式大記念館を建立し、大祭祝日等の際市民の遙拜所となして居る。

縮景園　市内上流川町の北端に在つて、舊藩主淺野家の別邸である、元和五年淺野長晟入國の翌年造成せしもので別稱を泉邸と謂ふ。

園景の全部を支那西湖に模したりと謂ふので縮景園の名があるのである、面積三萬九千六百六十九平方米であつて、奇石珍木配置の巧妙なこと、五歩にして其の趣を異にし、十歩にして其の景を移し、閑雅幽邃なること宛然仙郷に遊ぶが如き感がある。

園内の大書院を清風館と言ふ。

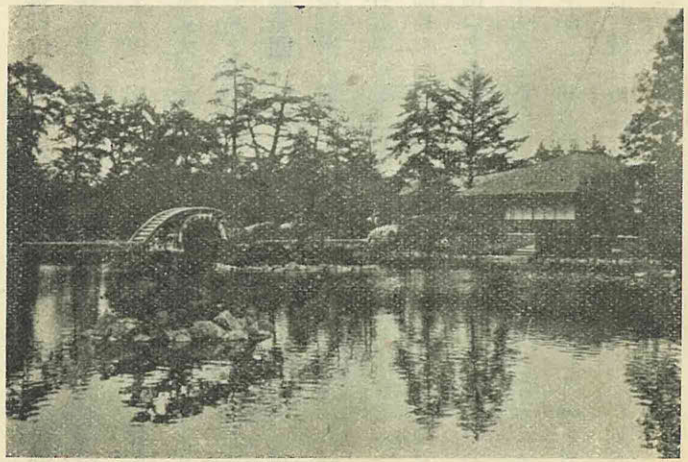
明治二十七年車駕行幸あらせ玉ひてより屢々高貴の方を御迎へ申した所である。

尚園の西南隅に觀古館あり淺野家の家寶を陳列して一般の觀覽に供して居る。

里程は廣島驛より九百八十二米あり。

明治天皇御飲料の井泉　縮景園内にあり、明治二十七八年戰役の際、駐輦八箇月の間日常供御の清水を此の井泉より採らせられたものである。

饒津神社　市内二葉の里二葉山麓に在り、天保六年安藝守淺野齊肅祖先追孝の意を以て造營せられしものにして、太祖淺野長政夫妻及幸長、長晟公を祀る、境内敷地二萬一千八百十八平方米あり、結構宏壯にして西に神田川の清流を控へ背後に綠樹鬱蒼



縮景園

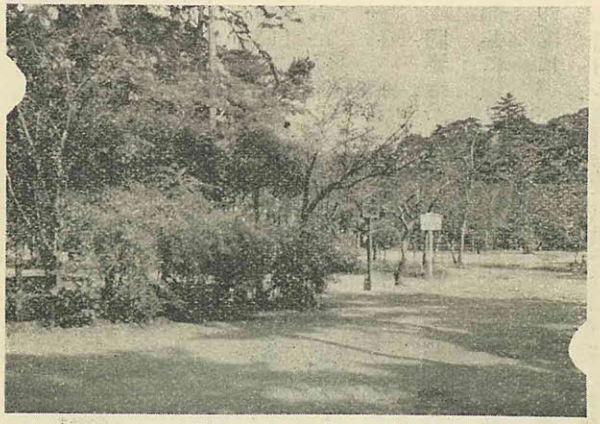
たる二葉山を負ひ頗る雅致に富む明治五年二月社格を縣社に列せられて居る。

里程は廣島驛より約千三百米である。

二葉の里　大須賀町の西北隅に在り現在は町名を二葉の里と稱ふ。

其の大半は饒津神社の境内にして、北は二葉山を負ひ、西南は神田川の清流を控へ、古松老杉鬱茂して枝を交へ、梅櫻楓樹亦其の間を點綴して幽閑の風趣に富んで居る。

明治七年九月公園地となつたが、同三十一年八月本市が比治山、江波の兩公園を新設するに及んで縣は公園を廢して饒津神社の境内地としたのである、而して四季の



饒津公園

遊客常に絶えず艶陽四月の候には遊覽の士女殊に多く、又初秋萩殊に名があり日夜遊客の絶える間のない狀態である。

尙此の外に太宰原天滿宮及明星院、鶴羽根神社等がある。

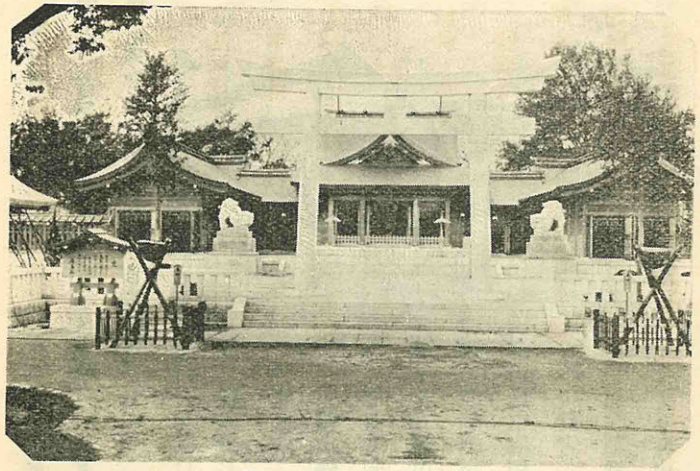
里程は廣島驛より約千三百米である。

宇品島　現在に於ては元宇品町となつて居るが、舊時は安藝郡仁保島村に屬し、宇品築港の後、明治三十七年十月本市に編入したものである、全島老樹繁茂鬱蒼し稀有の古代原始林である、島脊に觀音院があり眺望絶佳である。

國泰寺　市內小町に在り、宗派は曹洞宗にして僧惠瓊の開基に係り文祿年間朝鮮木を以て建立せりと謂ふ、後三度の祝融に遇ひ舊態は存ぜざるも尙結構壯大なるものがある。

境內に豐國神社竝豐公遺髮の塔及淺野公數代の墓標、赤穗

國泰寺



廣島招魂社

義士大石義雄の室石東氏及大石大三郎の各墓石が在る。

寺內に天然記念物として指定されたる樟三樹あり。

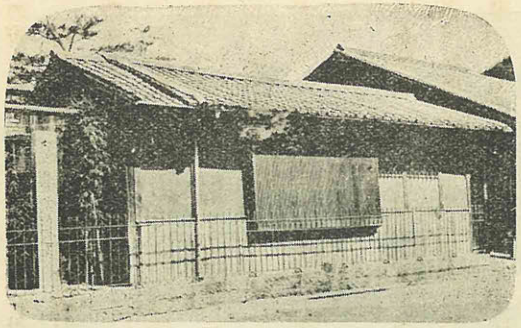
里程は廣島驛より約二千七百五十米あり。

官祭廣島招魂社　は現在西練兵場西南に在り。

神靈は明治維新より明治十年戊申の役に至る迄の皇國の爲獻身したる七十八柱の英靈及明治十年以後幾多の戰役事變に際し護國の精魂と化したる三千餘柱の英靈を合祈して居る、社殿の結搆近郊に其の比なく神苑は太田川の淸流に臨み老松灌木を以て蔽ひ神嚴なる小公園化せしめんとして居る。

里程は廣島驛より約二千三百米である。

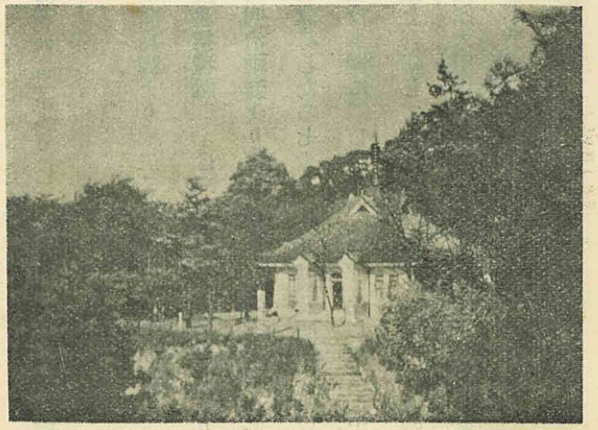
賴山陽の舊居　市内袋町に在り、一世を指導し維新回天の大業の源を成したる「日本外史」を著述せられた居室等當時のまゝを保存して居る。



賴山陽舊居

里程は廣島驛より約二千七百三十米である。

賴山陽文德殿　比治山公園の山腹に在り、賴山陽先生百年祭を記念する爲に廣島市單獨の事業として計畫し山陽文德殿建設翼賛會の努力により完成、昭和九年十月十五日の竣工である、殿内には縣下出身の青年彫刻家、富樫政人氏の丹精に成る先生の聖像が安置されてある。

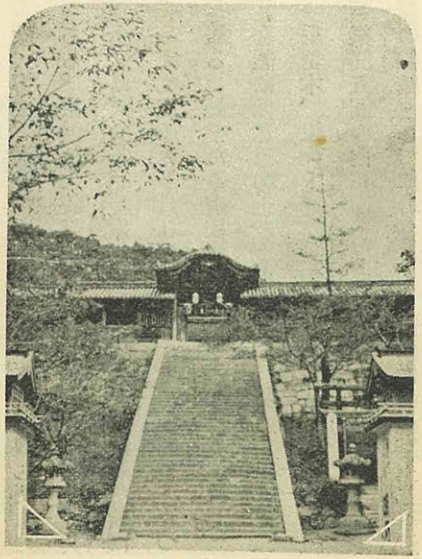


山陽文德殿

賴家諸先生の墓　賴山陽の父春水を初め賴家一族諸先生の永眠の地である毎年一回有志によりて祭典が行はれる。

觀喜松　山陽文德殿の境内に在り、樹齡千年の老松此の地は元安養院觀喜寺の在りし地である。取り殘されたる老木に昔の名殘りを止めて名刹の遺跡が物語られて居る。

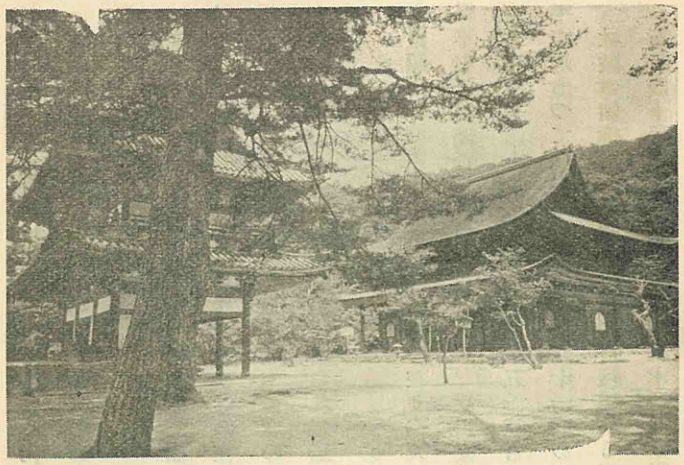
東照宮　市内尾長山の中腹に在り、天保年中藩主淺野光晟の創建に係り、德川家康の靈を祀るところである、境域五千三百平方米あつて社殿は南面し石階五十一段ある。



東照宮

社殿の結構壯麗を極め往時は祭禮儀頗る盛大であつたと謂ふ。

石階の下參道の兩側に櫻花の竝木があり陽春の候には賞遊を試る者絶間が無い。



不動院

里程は廣島驛より約千九十米である。

不動院　市内牛田町太田川左岸に在つて、足利尊氏が諸國に建てた安國寺の一にして、僧惠瓊が殿堂、方丈、書院、厨庫等を建て之を再興したものである。宗派は古義眞言宗仁和寺の末寺であり、其の金堂は天文年間の建立にして、天井畫龍の落款に、「天文庚子冬十月日僧永怡筆」とあり國寶となつて居る。純乎たる唐様禪宗建築重層入母屋造にして、全體は低き三和土の壇上に立ち、軒は上下共に二重扇垂木、組物上層は三手先の詰組、下層は三斗組、梁間五間の内正面一間開放となつて居ることは禪宗の佛殿としては珍らしく、四面には棧唐土と華燈窓とを設け、内部は土間、中央に須彌壇がある、天井は中央鏡天井にして、永怡の天人、龍の畫がある。

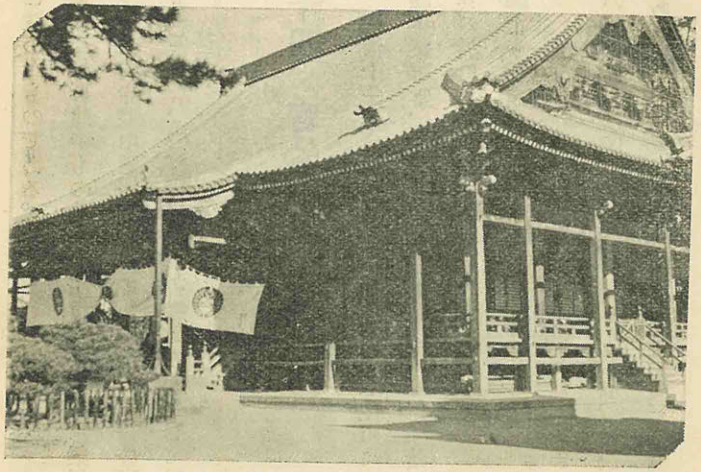
其の他は總て化粧屋根裏を露出し、其の自由な構造に大に見るべきものがある。内部の柱、虹梁肘木、太瓶束等總て極彩色を用ひ、此の建物には後世の補修多分に加ははつて居るけれ共、確に室町時代禪宗建築の傑作の一に數えられる。

本尊藥師如來坐像は國寶であつて藤原時代典型的の作品である。梵鐘は（銅製）一には形式上は普通の朝鮮鐵にして何れも國寶に指定せられて居る。

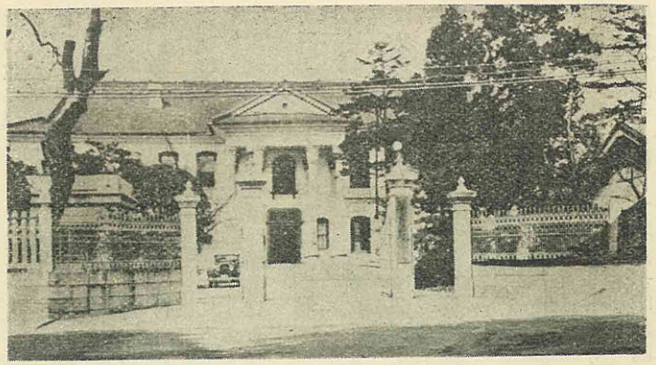
太田川の歸帆を眺め春は櫻、夏は瀧、秋は茸狩、紅葉狩一日の行樂地として賽客跡を絶たざるの風景である。

里程は廣島驛より約三千米。

本派本願寺廣島別院　市内寺町に在り、元は龍原山佛護寺と稱して居たが明治四十一年四月本派本



本派本願寺廣島別院



廣島縣廳

願寺廣島別院と改めたものである。

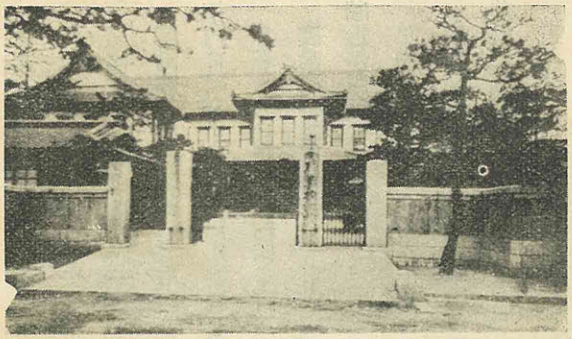
その本堂は文久二年再建のものにして桁行二十間餘、梁行十八間餘であつて市内寺院中第一のものであつて、眞宗安藝門徒の大本山として約八萬の善男善女が讃仰の本として居る。

十四、官公衙其の他

廣島縣廳　明治十一年建築したるもので市内水主町に在り、構内廣く縣會議事堂、武德殿及縣立廣島病院等相隣接し名園與樂園は其の裏にあつて春季に最も佳し。

里程は廣島驛より約三千二百七十米あり。

廣島控訴院　市内小町に在り、明治十九年五月設置せられたもので其の管轄區域は岡山、山口、廣島、鳥取、島根、愛媛の六縣であり管内に地方裁判所六、區裁判所三十九ある。



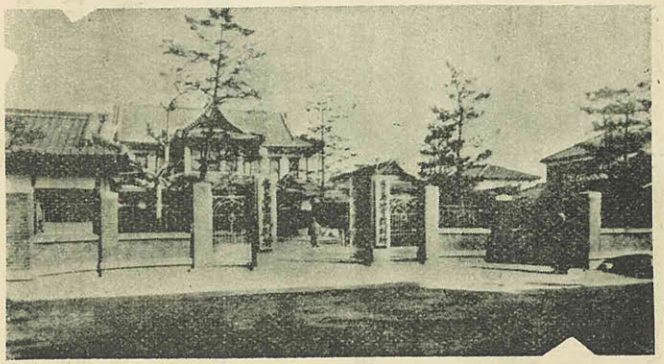
廣島控訴院

里程は廣島驛より約二千七百三十米ある。

廣島地方裁判所　市内三川町に在る、明治十四年の建築にして其の管轄區域は廣島縣一圓にして、吳、尾道に各支部がある。

里程は廣島驛より約二千三百米あり。

廣島區裁判所　廣島地方裁判所構内に在り、其の管轄區域は廣島市及



廣島地方裁判所同區裁判所

佐伯、安佐、山縣、安藝各郡の本市に接せる一部を直轄して居る。

廣島文理科大學　市內東千田町に在り、昭和四年四月の開校にして、文科、理科に分れて居る。尙附屬圖書館及南隣して博物館がある。

里程は廣島驛より約四千百六十米あり。

廣島高等師範學校　市內東千田町に在り、明治三十五年の開校にして文科、理科、教育科に分れ構內に附屬中學校、同小學校を併置して居る。

里程は廣島驛より約四千百四十米ある。

廣島高等工業學校　市內南千田町に在り、大正九年一月の開校にして、電氣、應用化學、機械、釀造の四科に分れて居る。

里程は廣島驛より約四千八百米である。

廣島高等學校　市內翠町に在り、大正十三年十二月の開校にして、文科、理科に分れ、其の規模甚大なるものである。

里程は廣島驛より約二千百八十米である。

廣島縣女子專門學校　市內下中町に在り、昭和三年四月開設せられたるもので現在は縣立高等女學

校構內に在るけれ共目下宇品町へ新校舍建築中である。

廣島遞信局　市內基町に在り、昭和七年三月起工同八年四月竣工し總經費四十四萬圓で白色四階建近代的建物である。

里程は廣島驛より約千二百十米である。

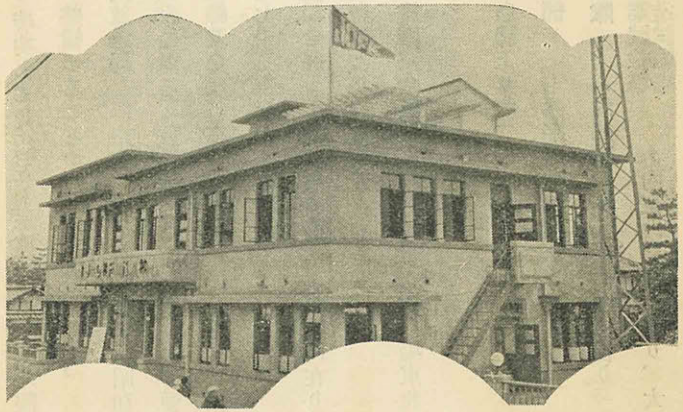
廣島商工會議所　市內猿樂町に在り、明治二十四年三月の設立にして本市商工業界の發展に資して居る。

里程は廣島驛より約二千七百三十米である。

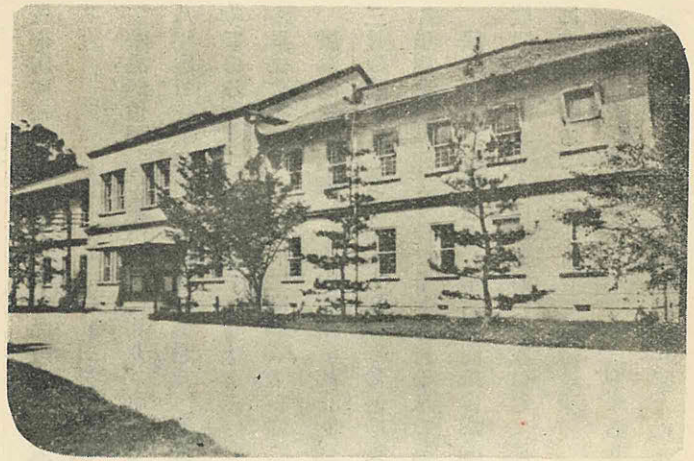
廣島縣產業奬勵館　本館は商工會議所と相對して猿樂町に在り、大正四年五月の開設にして產業の指導奬勵に盡して居る。

里程は廣島驛より約二千七百二十米あり。

廣島驛　市內大須賀町に在り、大正九年一月起工同



廣島放送局



第五師團司令部

十一年八月竣功し工費約五十二萬圓を要し外觀の美、內部の整備せること中國第一の稱がある。

廣島中央放送局　市內上流川町に在り、昭和二年五月の創設に係る、放送管內は廣島、山口、愛媛高知、島根縣及鳥取、高知縣の各一部で現在ラヂオ聽取者八萬七千三百七十二人である。

第五師團司令部　舊廣島城廓本丸跡下に在り。里程は廣島驛より約二千五百米あり。

步兵第九旅團司令部　市內基町西練兵場東北側隅に在り。里程は廣島驛より約二千米あり。

陸軍運輸部　市內宇品町に在り。

廣島憲兵隊　市內基町西練兵場東南に在り。

廣島縣工業試驗場
同釀造試驗場　市內東白島町に在り、大正八年に開設し現在に至つて居る。

廣島縣水產試驗場草津支場　市內草津町に在り、大正十二年十二月に開設せられ現在に至つて居る。

市立各廨一覽

宇品出張所	市內宇品町一三〇二ノ二に在り	
宇品棧橋	同	宇品海岸通四丁目一、三〇二に在り
仁保出張所	同	仁保町一、一一七に在り
矢賀出張所	同	矢賀町八四四に在り
牛田出張所	同	牛田町一、四六八に在り
三篠出張所	同	三篠本町一丁目七八二ノ一に在り
己斐出張所	同	己斐町一六六ノ四に在り
古田出張所	同	古田町一、二八三に在り
草津出張所	同	草津東町二三九ノ二に在り

公會堂	同	國泰寺町二〇三に在り
船入病院	同	舟入幸町六五〇に在り
衞生試驗所	同	舟入幸町六五〇船入病院内に在り
屠場	同	福島町に在り
常設家畜市場	同	福島町に在り
東松原公設市場	同	大須賀町一、〇四八ノ三に在り
荒神町公設市場	同	荒神町二に在り
段原町公設市場	同	段原大畑町一〇九ノ九に在り
大手町九丁目公設市場	同	大手町九丁目二三二に在り
天神町公設市場	同	天神町官有に在り
河原町公設市場	同	河原町一二にあり
東診療所	同	荒神町二六六に在り
西診療所	同	西觀音町一丁目二、二〇三ノ一に在り
中央職業紹介所	同	千田三丁目に在り

勞働紹介所	同	千田三丁目に在り
東隣保館	同	尾長町四〇三ノ五に在り
西隣保館	同	福島町四〇〇ノ一に在り
草津託兒所	同	草津東町三九四ノ四に在り
仁保託兒所	同	仁保町一〇八ノ三に在り
廣瀨託兒所	同	廣瀨町二〇二ノ二に在り
江波託兒所	同	江波町五三二ノ一六に在り
三篠託兒所	同	楠木町二丁目三二三に在り
楠那託兒所	同	仁保町六一八に在り
東公益質屋	同	稻荷町八二ノ一六に在り
西公益質屋	同	天滿町一九二ノ一に在り
水道部基町分室	同	基町二に在り
水源地	同	牛田町一、八九六ノ三に在り

79E

昭和九年十二月二十日印刷
昭和九年十二月二十五日發行

廣島市役所

廣島市大手町七丁目一番地
印刷人　增田計雄

廣島市大手町七丁目一番地
印刷所　株式會社　增田兄弟活版所
電話三三三・五八三番

318.10
広島市
No. 4501-18
公文書館所蔵

廣島市役所